

英雄伝説～修の軌跡～

影後

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黄泉帰る剣帝は何を見る。死んだはずの執行者剣帝レオンハルトは七曜歴1206年に目覚めた。そこで彼は新たな仲間を得て、真なる闘いに身を投じる。

目次

第1話	1
第2話	6
第3話	11
第4話	17
第5話	24
第6話	33
第7話	39
第8話	45
第9話	51
第10話	56
第11話	62
第12話	66
第13話	71
第14話	77
第15話	83
第16話	89
第17話	97

第1話

そこは何も無い虚無だった。そこに一人の男が現れた。

「ふむ、実験は成功のようだね。さあ、黄泉がえり紡ぎたまえ。君の修の物語をね」

男が消え、虚無の空間に光が現れた。光は人の形を取り、一人の男が現れた。

「俺は、」

OP銀の意思 金の翼

「■■■■、レ■■■■、レー■■■■、レーヴェ」

誰だ。俺を呼ぶのは。

「ヨシユ、ア」

激しい閃光を浴び目が覚める。周りには花畑が広がり自分は底に仰向けに横たわっていた。

「うっ、」

あたりを見回すと廃虚が見えた。草木が建物を多い、周りには何も無い。だが奥へと続く一本の道があった。自分でも良く解らないが身体が勝手に動いていた。一步一步踏みしめ、前に進む。あったのは一つの慰霊碑だった。そして半ばから折れた一本の剣。

「ハー、メル。ケルン、バイター」

慰霊碑と剣に手を触れる。すると、今までの事がフラッシュバックし、俺はケルンバイターから手を話した。

「ここは、ハーメルか。しかし、俺が何故生きている」

俺が生きている理由は解らない。だが、目の前に存在するケルンバイターが光り輝く。

「フツ、また俺と共に戦ってくれるのか魔剣ケルンバイター」

引き抜くとケルンバイターの折れた刀身が蘇る。それはまるで所有者の帰還を祝福している様だった。

「フツ、しかし今は一体何年だ」

俺が死んでから時間は経っているはずだ。今は、それを調べるしかない。俺は先にハーメルにて使える物がないかを確認した。今は無

一文だ。まともな生活を送るにはミラが必要だからな。

近くの廃墟を探すと鞆が見つかった。煤けているが、穴は空いていない。

「！カリン・アストレイそうか、ここだったのか」

それはかつてカリンが着けていた物だと、縫われた刺繍からわかった。

「借りるぞカリン」

魔獣を倒しながら山道を降る。そして南京錠の付いたフェンスを見つけた。

「！貴様等は、！」

帝国が、リベールがハーメルを未だに隠し続けている事に怒りを露わにってしまった。俺はケルンバイターを構え、フェンスに向かいクラフトを放つ。

「破碎剣」

フェンスは音を立てて崩れ落ちる。俺は迷った。このまま何処へ行くか。遊撃士達から情報を集めるのなら、リベールが最適だ。だが、最悪の場合ヨシユアやエステル・ブライトと鉢合わせする可能性もある。事実、生きていると知られればアガット・クロスナー等は戦いを挑んで来るだろう。帝国には遊撃士協会は解らない。俺がロランス・ベルガーとして雇った猟兵達に襲撃させてから、活動が困難になっただけははずだ。だが福音計画が終了しているはずだ。今は幻焰計画、帝国に行けば奴等はいる。俺はパルムの方へ向け歩き始めた。パルムに到着し、近くの工房にてセピスを換金した。今の俺は導力端末を所持していない。セピスは無用の端末だ。

「兄ちゃん、一体どれだけのセピスを、まあいい。全部で16,980ミラだ。他に要件はあるかい？」

「では食材が欲しい。旅用の品はあるか？」

「隣に売ってる」

教えられた位置では確かに旅人用の品を売っていた。乾物、野菜。必要最低限の物だけを購入しパルムを出た。あたりは夜更け、既に人の気配は無い。セントアークも、既に門は閉まっているだろう。

「フツ、遊撃士はこの様に星を見ていたのかもな」

柄にもない事をしていたと自分でも感じていた。夜の街道を魔獣を仕留めながら進む。すると急な爆発が聞こえてきた。俺は爆発のあった位置まで走った。

「シャーリイ、てめえ！」

「あはは……！ランディ兄、久し振りだね」

「昼間の……！それにアンタは」

「フフ、久しいですわね。灰の起動者」

赤髪の男女に、黒髪の男、それにデュバリイだと？結社が動いていると仮定して来てみたが、まさか知り合いに出会うとはな。

「執行者N.O. XVⅢシャーリイ・オルランド」

そうか、俺が死んだ間に執行者となった。そんな所か。話し込んだ後、少年少女達に対し人形兵器が襲いかかる。どう考えても過剰だと言わざるえない。

「?!アレは」

「キヤアアア」

「ティーター！」

身体が動いていた。ヨシユアが妹言った少女。

「え？」

「なっ、なっ！」

「ティーター・ラツセル、お前はあれから成長した様だがまだまだだな」

「へえ、アンタ中々やるじゃん。ちよつと、遊んでよ！」

「止めなさいシャーリイ、その男は貴女の敵う男では！」

「受けてみよ……！剣帝の一撃を！」

「テスト・ロツ」「鬼炎斬！」

シャーリイ・オルランドと名乗った執行者に対し、俺のスクラフトを放つ。

「えっ、キヤアアア」

工房で作られたと思われる武器ごと切り裂き、地面へと打ち付ける。

「フツ、仕留めたと思っただが運が良かったな」

「ハハツ：お兄さん容赦ないね」

目の前には切り裂かれ大量の血を流したシャーリイ・オルランドが立っている。普通なら立つこともままならない状況のはずだが、流石執行者と言った所か。

「ならば、次で仕留める」

「影技・剣帝斬」

「分身」

「くう、どうやって生き返ったのかは知りませんが！本物のようですわね！執行者N.O. II 剣帝レオンハルト！」

「あつ、、、あ」

名乗りを上げるつもりは無かったが、デュバリイのせいで俺の方まで警戒が向く。

「俺は結社を抜けた身だ。今更執行者呼ばわりは止めてもらうか」

「くつ：くう、、、マスターに認められていながら執行者を辞める？ふざけてますわ！」

「さて、あれから強くなったのか試させて貰う」

「ちよつ、あああああ！もう良いですわ！プリズムキャリバー！」

「燃え盛る業火であろうと碎け散らすのみ：ハアアア……滅！」

絶技・冥皇剣

デュバリイのプリズムキャリバーを打ち破り、冥皇剣は彼女の剣を碎いた。

「あつ、ああマスターから頂いた剣が…」

「ふむ、実力は変わっていないか？いや少しは上達しているようだな」

「コツこいつ……覚えてやがれですよ！……あ」

「くつくく、最後の最後まで変わらないなお前は。第7柱に伝えておいてくれ。貴女を越える」と

「……!!!良いですわ。しっかりと伝えます、ただし今度は負けませんわ」

デュバリイは最後にそう言い残すとシャーリイ・オルランドを連れて撤退した。周りの人形兵器も少年少女達が制圧し終えた様だ。ど

うやら、実力は有るらしい。

「あつあのお、レオンハルトさん？」

「どうしたティータ・ラツセル。お前とは影の国以来だな。少し話をしたいがそうは言えないようだ」

「え？」

俺を囲む様に双剣使いの少年、刀使いの男、トンファー使いの少女、戦術殻を使う人形が立っている。

「代表として言わせて貰います。俺はリイン・シュバルツアー、この度は援護感謝します」

「俺は、、ロランス・ベルガーだ」

レオンハルトの名前を伝えるか迷ったが、身分としては存在しているロランスの名を名乗った。

「貴方は、結社の一員ですか？」

「シュバルツアー、何をしている。直ぐにその男を拘束しろ！」

「だつ駄目！駄目です！レオンハルトさんは」

「よせ、ティータ・ラツセル。どうせ、コイツラに捕まるほど弱くない。離れる、お前を巻き込みたくない」

「はっはい」

「随分と余裕そうね！私達から逃げれると」

「既に俺はそこにいないぞ」

「分身？しかし」

俺は離れた。そして居るだろう男の下に向かう。ティータ・ラツセルが居るんだ。あの男も居ておかしくない。

ーアガット・クロスナー

第2話

「ふっ、セントアークか10年前と余り変わらないな」

俺は今夜のセントアークを歩いている。時間的に最後の買い物だろうか、皆急ぎ足で動いている。だが、今はそれよりもアガット・クロスナーを探すのが先決だ。先程、大剣を背負った赤髪の男と刀を持った女が歩いているのが見えた。アガット・クロスナーとアネラス・エルフィードだ。今回は二人に合流し、奴等から情報を得なければ。

聞き込みから開始すると何故か俺は子供達に引っ張られた。

「ねえ、お兄ちゃんってアガット兄ちゃんとアネラス姉ちゃんの知り合い？」

「ああ、リベールでは共に戦った仲間だ」

間違いじゃない。ゲオルグ・ワイスマンとは敵対していたからな。

「こつちだよ、遊撃士さん」

「？」

一人の少年に連れてこられたアパート。その一室には導力端末があり通常の部屋とは思えない。

「後で帰ってくると思うから、バレないようにね！」

帝国は遊撃士を取り締まっているらしいからな。仕方がないが、それよりも俺は部屋の段ボール箱の中身が気になった。中身は壊れた戦術オーブメントだ。近くに工具もあり、一つを治すことに決めた。博士から色々と言われていた事もあるが、いざやるとなると難しいな。四苦八苦しながらも何とか形になった。だが、解らない何だ。この中心のスロットは、少なくとも俺の知るクオーツの大きさでは無い。考えたいが、目的の人物は既に廊下に立っていた。

「入れば良いだろう。元はお前達の物だ」

「てめえ、結社の一い…ん？」

「アガット先輩、どうしたんですか？あれ、え？」

「久しぶりだな、アガット・クロスナー。ヨシユアは元気にしているのか？」

「フックハハ！出会って最初にヨシユアかよ」

「大事な弟だからな。アネラス・エルフィードも、久し振りだ」

俺は暫くの間二人から質問を受けた。何故生きているのか、どこに居たのか。最後は他愛もない雑談だったが。

「それで、剣帝お前は どうするんだ？」

「結社にか：今更戻るつもりは無い。だが、越えたいと思つた人はい
る。その人に勝つ、それで完全に結社と縁を切ろう」

「なら、遊撃士になりませんか？きつと天職になると思います」

「：遊撃士か、考えた事も無かつたな」

「しかし、結社が来るとはな」

「ティータ・ラツセルを労つてやれ。勇気を出し戦つていたぞ」

「そうだ！なら、一緒に行動しましょう！なら私もティータちゃんの
可愛い成分を堪能できます！」

つい笑つてしまった。しかし、遊撃士と言うのも悪くないかもしれ
ない。ヨシユア達と行動するのなものな。

「それで、ソレが御前の組み立てたアークスⅡか。まったく凄えよ」

「アークスⅡとはなんだ？」

「あー：悪い、そう言うのはティータに聞いてくれ」

「アガット先輩？」

アネラス・エルフィードの顔が曇つた。何だ、嫌な予感がするが。

「それよりもだ、レオンハルト。お前リベールに来るのか？」

「どうだろうな、今結社が帝国で活動しているのなら。俺は帝国に残
ろう、それに越えたいと思える人が居るからな」

アガット・クロスナーは今までの見たことの無い顔を俺に見せてき
た。驚いている顔だ。

「お前、その相手は超えるべき壁なのか？」

「解るのかアガット・クロスナー」

「昔の俺みたいな顔してやがるからな」

「え！嘘だ、アガット先輩よりも爽やかでしたよ！」

「てめえアネラス！」

「クックハハハ、まったく面白いなお前達はアガット・クロスナー、ア

ネラス・エルフィード」

「アガットだ」「アネラスです」

急に二人は俺にむけて名前を言う。知っているのに何故だ？

「アガット・クロスナーって、なんか呼ばれなれねえんだよ。だから、俺はアガットだ」

「私もアネラスです！」

アガットが左腕を出してくる。俺もそれに右腕を返し

「レーヴェでいい」

「おうレー」「はい、レーヴェさん！」

「アネラス、お前な」

まったく、面白い奴等だ。

「それで、状況は？」

「ああ、先刻だが俺はデュバリイとシャーリイ・オルランドと言う執行者と戦闘した。結社が何かしら動いているのは確実だろう」

俺の言葉にアガットとアネラスは顔を曇らせる。

「レーヴェ、そのシャーリイ・オルランドつてのは紅の戦鬼の呼び名がある。そしてオルランドつて言ったら」

「はいアガット先輩、赤い星座の現団長のシグムント・オルランドの娘です」

「チツまさか猟兵まで絡んでくるのか」

「それに赤い星座つて言ったら」

「はい、クロスベルで虐殺事件が」

それを聞いた時、頭にあの時の風景が浮かんだ。

俺はカリンとヨシユアに連れて逃げていた。逃げていた。そこに

…

「また、またなのか。最初は帝国で、今度は結社か！俺はクソオオオツ！」

俺は机に拳を叩きつけた。俺はすぐに自分を見る二人に気づき、心を落ち着かせる。

「すまない」

「いや、誰だってそうなる。俺も…妹が死んだからなああの戦争で」

「アガット先輩、レーヴエさん…よし、アガット先輩、レーヴエさん、今日は再会を祝して御祝いしましょう！」

「ふっ、悪くないな」

「しようがねえ、エステルとヨシユア、レンとティータも居れば完璧だったんだけどな」

俺達は笑った。少しの酒とアネラスの作った料理を食べて。

2時間ほどでお開きとなり、明日に備えて休む。ベッドはアネラスに使わせ、俺とアガットとは地面に座る様に眠った。

「ふむ、どうやら安定しているようだね」

「貴様、何故」

「君を黄泉帰らせたのは私なのだよ？感謝される筋はあれど恨まれる筋は無いと思うが。まあ、今は忘れたまえ。直にわかるさ」

「待て！」

目覚めは素晴らしいものだった。窓から指す光を受け、小鳥が鳴いている。たまにはこんな休日も良いかもしれないな。

「アガット、アネラス、起きているか？」

「ああ、起きてるぞ」

「むにやむにや、可愛いは正義、可愛い物には福がある、可愛さ余って可愛さ100倍」

惚けると言うか、気が抜けると言うか。

「こいつ、影の国でも同じ事言ってなかったか？」

影の国か、あの時にヨシユアやレンと交わした言葉、無駄になってしまったな。

「おいアネラス起きろ」

「ふあ：アガット先輩？レーヴエさんもおはよう御座います」

「ふっ、朝食位奢ろう10年前の記憶だが手頃な値段で美味しい店を知っている」

「なら、そこにするか」

「わーい！ありがとうございますレーヴエさん！」
こうして友人と笑い合える。いつか、ヨシユアともできるだろう
か。

第3話

昨晚の襲撃の事を改めて二人に話す。襲撃の状況等も調べる上では必要だろう。その後、俺はセピスをクオーツにそして、マスタークオーツと呼ばれる物の売買にでかけた。今の俺はアーツ一つ扱えん。負けるつもりは一切無いが、これでは戦闘は不利だ。

「お兄さん、工房にようかい？」

「ああ、クオーツとマスタークオーツが欲しい」

「クオーツならセピスがあればできるけど、マスタークオーツは難しいよ。一樣、何個か在庫はあるけど、見てみるかい？」

ミラを支払いシルバートーン、アースガード改、ティアラルのクオーツを。空いているスロットは身体能力強化系統のクオーツをつける。

「マスタークオーツは残念だけど置いてないんだ」

「そうか、残念だ」

俺が店を出て帰ろうとしたとき、ズボンの裾を子供が引っ張る。

「お兄さん、探してるのコレ？」

そこには俺のケルンバイターの様な模様が刻まれた大きめのクオーツがあった。

「お兄さんにあげる、だからまた家のお店に来てね！」

「ふっ、商魂逞しいな」

子供はそそくさと帰っていく。これが本物かは解らないが、良いだろう。俺はアークスIIにセットした。すると、全ての導力回路が繋がり今までよりも身体が軽く感じる。

「俺と相性が良いようだな」

俺はアガット、アネラスと合流するため拠点に帰った。

戻ると丁度二人が荷物を持った所だった。

「しかしレーヴェ、そのバッグは」

「煤けているが使える。個人的には修理したいのだがな」

「わかった。これが上手く行ったら後で俺がリベールの優秀な奴に預けてやる」

「なら、私はプレゼントとして遊撃士御用達のバッグあげますね！」
まったく、最初から上手く行くとはこいつ等は本当に変わらないな。

「あと、レーヴェ。身分証明書はあるのか？」

「ロランス・ベルガーの物があつたが、お前達に潰されただろうな」

アガットは悩んだ様だがすぐに答を出した。

「わかった。レーヴェ、お前は俺達の民間人の協力者だ。身分は俺とアネラスが保証する。アネラス良いか？」

「勿論です、アガット先輩！」

「よし、なら行くぞアネラス、レーヴェ！」

セントアークを出て街道を歩く。

「ンフフっん、ティータちゃんの可愛い成分絶対堪能しちゃうんだからー！」

「おいおい、アネラス」

「アガット先輩は良いじゃないですか！皆でお別れパーティーしたのにアガット先輩だけ帝国まで行って……オリビエさんの招待だったんでしよう！ずるいですー！」

「いや、俺はヨシユアやエステルからも」

そこで俺はふと疑問に感じた事を探ねる。

「何故ヨシユアやエステル・ブライトが帝国に来なかつた？」

「…帝国政府はギルドに規制を強いてな。エステルとヨシユアは国内に入った瞬間逮捕されてもおかしくない」

それをアガットは悔しそうに話す。帝国、ギルドの規制恐らくは俺の1件も関わって来るだろう。今更謝る理由は無いが、本当に俺の1件だけなのか？他にも何か理由が。

「着いたな」

「アガット。アネラス、すまないな。俺は一端隠れさせて貰いたい。昨晚の件もある。俺がいると警戒されるだろう」

「わかった、なら警戒を頼む。結社の奴等が居てもおかしく無いからな」

俺はアガットに頷くと崖を駆け上がる。ここはアガットに任せるのが最適だろう。

ティータが学生と話してる。彼奴の性格だ、機械が関わったりしなけりや友人は簡単に作れるだろう。

「よう、丁度昼飯時か?」

ティータは俺の声に気付くとゆっくりと振り返った。

「あ、あ……アガットさん?! わああつ、アガットさん! ほ、本物ですよね?!」

俺に本物も偽物もあるかよ。

「つて、見りや分かるだろ。3週間ぶりつてどこか。元気にしてたか、ティータ?」

「えへへ、はい! みんなとつても良くしてくれて……」

俺とティータが話していると来たぜ。可愛い物好きが。

「わあ! アガット先輩ばかりです! 私もティータちゃんよ可愛い成分を堪能させて貰います! おお、ティータちゃんのほつぺたは何時まで経つてもプニプニで!」

「はわわわ、アネラスさん、やつ止めて下さい! くすぐったいですよお」

まったく、リベールに居るときと変わんねえな。まあ、ティータが元気なら良かった。これで体調崩してたりしたら、エリカ・ラッセルあたりが煩いからな。

「そうだ! 聞いてください、昨日結社に襲撃を受けたんです。その時、レーヴェさんが」

「ああ、昨日俺達に会いに来た。今は隠れてるが、俺達の見える位置にいるだろうな」

「レンちゃんとヨシユアお兄ちゃんに会わせてあげたいです」

ああ、きつと喜ぶだろうな。

「絶対にな」

俺がティータの頭をなでているとツールズ分校の教師らしい二人が来た。

「ああ！先輩見てください！ティータちゃんとはまた違った可愛い少女が！」

「アガット！」

「てめえ、昨日の！」

レーヴェが急に現れ、目の前の赤毛の男がスタンハルバートを構える。こいつ、確かクロスベル警察の特務支援課にいたはず。

「待て敵じゃない、レーヴェどうした？」

「おかしな男を見た。西風の旅団のマークの付いたジャケットだ。俺はそいつを追う」

くそ、赤い星座に西風の旅団だって、何が起きてやがる。

「悪いなティータ、だが安心しろ。俺達がどうにかする」

「そうだよティータちゃん、アガット先輩にレーヴェさん、それに私がいるんだもの！」

「でもお……」

「ティータ・ラツセル、お前のできる事をしろ。お前の敵だった俺が良く知っている。お前の行動力、心の強さ、リベールの時の様に見せてみる」

まさかレーヴェがティータを焼き付けるとは思わなかった。

「行くぞ、アガット、アネラス」

頑張れよ、ティータ！

俺が確認した位置に居た。西風のメンバーと思われる人間が。

「アガット、アネラスわかるか」

「あれは罫使いゼノと破壊獣レオニダス」

「それに猟兵王ルドガーですよ！死んだはずなのに」

つまり俺と同じという訳か。俺が黄泉帰った訳も彼奴に聞けば分かるかもしれないな。

「アネラス、行けるか？」

「勿論です、アガット先輩！」

「容赦できる相手じゃない、行くぞ！」

俺は二人と共に西風を襲撃した。

「なんやねん！」

「ほお」

「やるじゃあねえか」

俺が猟兵王、アガットが破壊獣、アネラスが罫使いへと攻撃をする。

「ふっ、受けてみる剣帝の一撃を！」

「ドラゴンフォール！」

「八葉滅殺！」

それぞれのSクラフトで各人を攻撃する。初手で沈めるつもりだったが、やはり一筋縄では行かないようだ。

「流石猟兵王とその部下と言ったところか」

「てめえ、何もんだ？」

「ふっ、昨日死んで黄泉がった男だ。猟兵王、お前は何故黄泉帰った。

俺と同じなのか？」

「まさか、団長と同じ騎神の起動者（ライザー）?!」

起動者、確かあの青年も灰の起動者と呼ばれていたな。俺とは別口で黄泉帰ったということか。

「ならば、貴様等が問題を起こす前に仕留める」

「ほお、俺達を仕留めると」

「遊撃士3人にとは舐められたモノやな」

遊撃士3人か、確かにな。……遊撃士か、良いかもしれないな。

「なら名乗らせて貰うぜ。Aランク遊撃士重剣のアガット」

「Bランク遊撃士アネラス・エルフィード」

「執行者N.O. II 剣帝レオンハルト」

名乗りは久し振りだな。この肩書も、近いうちに取払う事になるだろうな。

「なあ、あんたが結社の執行者ならマクバーンって知ってるか？」

「マクバーンか、また懐かしい名前が出たな」

「前にあんたが死んだ事を悔やんでたで。殺りあえる奴が減ってつまらんと」

彼奴らしい、結社最強の執行者。マクバーン、お前も俺の前に現れ邪魔をするのなら…

「さて、雑談は終わったか？なあ、今回俺達は一切関わってねえ。聞きたいことは話すからよ、邪魔しないでくれないか？」

「アガット先輩…」

「ちっ、俺達も情報が欲しい。良いだろう、条件を飲む」

「わかった。俺達は」

奴等が言うには不紫の騎神ゼクトールの起動者になる様に嵌められた。そして、不死者として黄泉帰つたらしい。

「お前も騎神の起動者なのか？」

「生憎だが、俺は騎神と言う物は知らん。……話は以上か？」

「ああ、お前と相克がない事を祈るぞ。骨が折れそうだ」

「レーヴェ、もう良いのか？」

「猟兵に思う所はあるが、話は聞いた。アガット、アネラス、付き合つて貰い助かった」

俺は二人に感謝を伝える。

「そうだ、ハーメルの方に行ってみろ」

「何？」

「俺は伝えたからな」

「ふっ、重剣。いつかまた会うことになるだろう」

「じゃあな嬢ちゃん、フィーの事頼んだで」

あのゼノと言う男、俺の知っている男に似ている気がするな。彼奴にも、感謝しなければな。…ケビン・グラハム、そしてリース・アルジエント。

また別の場所で

「待ってて下さい、アガットさん！」

とある少女が準備を始めていた。

第4話

宿营地たててティータ・ラッセルは装備を準備していた。先に進んだアガットに追いつく為、デアフリンガー号の個室にて母親エリカ・ラッセルから持たされたかつての装備と同じ物に着替え、誰にもバレない様に出ていく。

「アガットさん、待ってて下さい！」

「えっ！ティータちゃん！待って！」

その教師の声は届かない。ティータは愛用の導力砲を持ち、宿营地を後にした。

「おいおい、このフェンス壊したのお前か？レーヴェ」

「出てくる時にな。俺の邪魔をするものだ。関係あるまい」

「確かに、レーヴェさんなら自分の道を信じて突き進むって感じですねー！」

話しながらも襲って来る魔獣に注意を向ける。邪魔者を狩り、セピスに変える。

「レーヴェ、セピス塊も回収してけれ、今は換金してくれるんだ」

「ふっ、俺は古い人間だな」

軽口を言いながらも山道の入り口へと足を進める。

「あつ、アガットさん！」

「まてティータ！」

後から来たのはティータ・ラッセルと昨日見た八葉を使う青年だ。

「！貴方は」

「なんだ、ラインの知り合いか？」

「ラウラ、この人はデュバリイさんとシャーリイ・オルランドをほぼ一撃で倒したんだ。それに、剣帝と呼ばれていた」

「ライン、それおかしいよ。サラとエステルとヨシユアから聞いたことあるけど、剣帝レオンハルトは死んだって」

死人が黄泉帰るなんて、誰も信じはしないだろう。

「俺はロランス・ベルガー元特務少尉だ。数年前までリベール軍に所属していた。今はアガットとアネラスの友人として結社の作戦を打ち砕く為に動いている」

アガットとアネラスが苦い顔をしていた。あの時の事を思い出したんだろうか、全てが懐かしい。今ならそう思える。

「リイン・シュバルツァーです。帝国政府からの要請（オーダー）により行動しています」

「ふっ、帝国の生き人形と言う訳か」

「?!」

当りと言う訳か、不様だな。この男リイン・シュバルツァーと言ったか。技術は有るだろうが、芯が無いな。

「ロランスと言ったな。：リインが人形だと言うのか!」

「与えられた命令に疑問を持つことも、ましてや反発する事もしない。そんな存在を人形と言った。お前が違うというのなら、見せてみる」

教授は、ヨシユアを生き人形とした。リイン・シュバルツァー、お前もヨシユアと同じなのか。

「……少なくとも、俺は確かに要請を受けました。でも、要請が無くても、目の前で誰かが傷付くかもしれない状況を見過ごすことはできません」

「なら、見せてみる。お前の剣を。剣士ならば剣で語れ」

俺はケルンバイターを抜き、リイン・シュバルツァーに構える。

「リイン、こんな事してる場合じゃないよ!」

「エリオット、悪い。でも、俺は逃げない。ラウラ、立会人になってくれるか?」

「……わかった。見せてやれ、リインお前の剣を!」

リイン・シュバルツァーと俺は対面する。

「八葉一刀流中伝リイン・シュバルツァー」

「偽銘は名乗らん。身喰らう蛇が執行者No. Ⅱ剣帝レオンハルト」

「……始め!」

俺のケルンバイターとリイン・シュバルツァーの刀が打つかる。

「くっ、強い」

「弱いな。お前はあの時のアガツトよりも弱い、良くこの剣技で俺に挑む気になつたな。逃げていれば良かったものを」

俺は刀弾き、ケルンバイターでリイン・シュバルツァーを吹き飛ばす。岩に岩に背中からぶつかつた様だが、俺は手加減はしない。

「どうした？動けないか、ならばそこで寝ている。結社は俺とアガツト、アネラスが相手をする。お前達は」

「俺は…ガアア！」

黒髪だつた筈が白く変色し、戦い方もまるで獣の様に変貌している。

「…無駄だ。受けてみよ…：：：：：剣帝の一撃を！」

「おい、レーヴェ待て！」

「…：：：：：ぐう、まだだ！灰の太刀・絶葉！」

俺の一撃と八葉の奥義がぶつかる。それを正面から打破り、リイン・シュバルツァーの刀を吹き飛ばした。

「！…：：：完敗です」

「お前の剣には真つ直ぐな意志があつた。良いだろう、リイン・シュバルツァー。俺はお前を認めよう」

「ハハッ…：：：ありがとうございます」

リイン・シュバルツァーはふらつきながらも立ち上がり、刀を拾い鞘に納める。一瞬見せたあの力も鳴りを潜め、今は落ち着いている。

「リイン、ヒヤヒヤさせないで」

「そうだよ、心配したんだから」

「リイン、怪我はないか？」

お前も、仲間に恵まれているのだな。個人で戦う者は弱い、仲間と戦う者は…

「時間が惜しい、行くぞ」

「おう！」

道中、アネラスとリイン・シュバルツァーが話をしていた。同門の姉と師弟だ。話したい事はあるだろう、それにアネラスは剣仙ユン・カーファイの実孫だ。話す話題には尽きないだろう。

「あつ…：：：」

「白い花、か」

「こんな山の中で………綺麗だね」

「ひよつとしたら村の人が世話をしたのかも」

「流石元園芸部、そんな感じはするな」

「ああ：カリンや知り合いの何人かがこの花壇を世話していた。俺も、ヨシユアも、カリンに付き合わされた事があったな」

「人が居なくなっても花は残るか…」

「会話が続きかず一定の間静寂が俺達を包む。」

「……すみません、少し待ってもらえますか」

「俺も思った。レーヴェ、少し摘ませて貰うが良いか？」

「すまないな、俺にはその資格は無いからな」

「一度修羅となり、弟までも売った俺には…」

「忘れてくれ」

何か話していた様だが、俺は聞こえなかった。歩みを早め、ついに俺達はハーメル村まで来た。

「ここがハーメルか、お前とヨシユアが生まれた」

「………」

「………どうしてだろう。こんなに哀しい風景なのに」

「………綺麗だね」

「うん、哀しいのに優しい気がする」

「………美しい邑だったのだろう。この地に眠る魂が今は安らいでいる証拠かもしれぬ」

「………そうだと良いんだが」

「………レーヴェさん？」

頬を伝わる雫に気が付き、手を触れる。そこには今まで流れなかった俺の涙が確かにあった。

「すまないアガット、一人にさせてくれ」

俺を見たアガットは頷く事もせずただ、後ろを向いた。ハーメルの悲劇を知らない者もいる。恐らく、アガットなら話すだろう。俺は、あの木の下へ行った。

「君の影 星のように 朝に溶けて消えていく 行き先を失くしたま

ま 想いは溢れてくる」

気付いた歌っていた。ヨシユアが奏で、カリンが歌っていた星の在処。

「カリン、安らかに眠ってくれ。俺もいつかお前の下に」

「へえ、報告を受けた時は何の冗談って思ったけど、まさか本当に生きてるなんてね」

俺は振り向いた。空中に浮くピエロの様な少年、いやそれ以上の悪魔の存在をこの目に捉え。

「…カンパネルラ」

「うーんと…僕としては君の唄を聞いていても良かったんだけどさ。マクバーンが君を呼んで来いって。速く行ったほうが良いんじゃないかな？デユバリーが止めてると思うけど、彼、セツカチだからさ」俺は話を最後まで聞く前に走り出した。多数の気配が村の奥から感じる。

「マクバーン!!」

俺は奴に向かいケルンバイターを振り下ろす。だが、奴もアングバールで俺のケルンバイターを受け止める。その時、軽い衝撃波が起き、あたりが揺れる。

「クハハッ！ヨオ…レオンハルト、何年振りだ？」

「黙れ……」

「良いねえ、もつと俺を熱くしろや！」

「待ちなさいレオンハルト、マクバーン！ここで戦うつもりですか！」

デユバリーに言われ、当たりを見渡す。それぞれが献花しようとしている最中に俺が乱入し、邪魔をしてしまったようだ。

「うわあ、マクバーンにやれるって流石剣帝レオンハルトだね！シャーリーも本調子なら殺りあえたんだけどなあ」

(マクバーンと殺れるってorマクバーンと戦れるって)

あの時のシャーリー・オルランドも包帯をしながらも話しかけてくる。

「もお！どいつもこいつも自分勝手ですわ！」

「あれ？感動の再開とは行かなかったみたいだね？」

「そうですか、剣帝が襲ってきたのは貴方のせいですわね？カンパネルラ」

「僕はマクバーンを止めてるけど、彼はセツカチだからってレーヴェに伝えたただけだよ」

「貴方は！マクバーンを知っていれば予想しますわ！よりにもよってここで戦わせるつもりでしたの！」

つまり、俺はカンパネルラの遊びに見事乗り、ましてや仲間の邪魔をした訳か。

「…ぐあああ！」

俺は崖下に向かい一撃を放つ。八つ当たりだと理解しているが、俺の中にはまだ激しい怒りが渦巻いている。

「へえ、結社にいた時より強くなってるね」

「おいレーヴェ、良いじゃねえか…クハツクハハハツ」

結社の構成員と雑談をし、ハーメル村前の広場に出る。

「ここならハーメルに被害は出ない。カンパネルラ、マクバーン、お前達はここで倒すアガツト、お前達はデュバリイとシャリーイ・オルランドと戦え」

「そんな、一人でなんて無茶ですよ！」

「テイータよせ、レーヴェ。任せるぞリイン、聞いたな。マクバーンとカンパネルラはレーヴェが抑える。俺達は二人に専念するぞ」

これで良い、俺は今。あの時の様に激しい憎悪に包まれている。マクバーン、カンパネルラ、お前達に手加減は無用だからな。

「へえ、僕等と戦うんだ」

「お前、結社の時より鋭い目をしやがるな。良いぜやってやるよ！」

狂気的笑顔を受けべるマクバーン、道化師特有的笑顔を見せるカンパネルラ。

「こんな時、こう言うんだよね？身喰らう蛇が執行者No. 0道化師カンパネルラ」

「身喰らう蛇が執行者No. 1刳炎のマクバーン」

「身喰らう蛇が執行者No. Ⅱ剣帝レオンハルト」

「行くぜ！」「行くよ！」

「参る」

こうして道化師、却炎対剣帝の戦いが始まった。

第5話

「うーん試しかな」

カンパネルラがアーツを駆動させようとしている。

「零ストーム」

「ぐう」

「ヘルハウンド！」

「ぐう！」

炎が全身を焼く。だが、俺にとってそんな事はどうでも良かった。

「破砕剣」

「へえ、流石にやるなあ！レーヴェ」

「俺はお前と対峙するのは望んでいなかったがな」

マクバーンは最強。俺でさえ勝つのが困難な相手だ。だが、マクバーン。お前に勝てないのでは、師であるあの人には届かない。

「ねえ、まだ忘れて貰っちゃ困るんだよねナイトメアシャツフル」

「なっ、マクバーン！」

「灰の小僧が良いじゃねえか…前より混ざってるな」

「カンパネルラ、貴様！」

「リイン（教官）!!!」

「レーヴェか」

「相変わらずカンパネルラはろくな事を」

カンパネルラは隣で戦う者と俺の位置を入れ替えた。八葉の青年がマクバーンと対峙する。

「お？使わずに俺に勝てるのかよ」

「く！………神気合」

「そうだ…面白いじゃねえか！」

「剣帝のお兄さん！昨日のお返しだよ！」

「邪魔だ！」

迫りくる女の武器をケルンバイターで弾き、アガットの方に飛ばす。

「アガット、任せるぞ」

「ちっ、そう言うこつた。俺が相手だ…ドラグナーエツジ！」

「…へえ、赤毛のお兄さんもやるじゃん。シャーリイを本気にさせたんだから…付き合ってもらうよ！」

何とかアガツトに任せられたが、今度はデユバリイが俺の前に立つ。

「デユバリイ、邪魔をするのか」

「今回に限り私は貴方の邪魔はしませんわ。速くりイン・シユバルツァーを助けにお行きなさい」

「…わかつた」

デユバリイに感謝しながらも俺は、彼女が邪魔をしたら今度こそ斬るつもりでいる。敵の敵は味方ではない。ただの敵だ。

「灰の太刀・絶葉」

「ぐ…なんてな」

「甘いね、イクシオン・ヴォルト」

「ぐあー！」

吹き飛ばされる八葉の青年を受け止め、立たせる。

「下がれ、お前には無理だ」

「…わかりました。レオンハルトさん、頼みます」

實力を理解しているのは良い事だ。

「灰の小僧も前よりマシになってたな。…まあ混ざりきつてないが」

「うわあ…レーヴエが帰って来ちゃったな」

「クハハハ…レーヴエ、やるか」

「二死ね、マクバアアアーン!!!」

俺は分見を使い3人になり、マクバーンに斬りかかる。

「てめえ！」

「カンパネルラ、お前の相手は俺だ。零ストーム」

「うんうん、前よりも強くなってるしキレも増してるね」

「幻術か、だがルシオラの方が上だ！」

一人がマクバーンのアングボールを受け止め、一人がカンパネルラを抑える。そして俺はマクバーンの頭にケルンバイターを振り下ろす。

「……………レーヴエ、最高だぜ。やっぱりこうじゃなくちやなあ！」

「……………火焰魔神」

マクバーンの体中から却炎が溢れ出し、姿が変貌する。異能を全解放したか、これは尚更やりづらい戦いだな。

「…レーヴエ、お前はビビらないんだな、面白いな」

「その程度、恐怖する理由はない。俺は、俺の邪魔をする存在を斬る。それが何だろうと、俺とケルンバイターの前には無力だ」

「啖呵きつたな、なら見せてみるや！燃えろ！」

ギルティフレイムが俺を襲うが、俺も本気で行く。最早、手合わせじゃない、死合いだ。

「ケルンバイター、理の外の剣の力見せてみる！」

ケルンバイターが蒼く輝き、マクバーンのギルティフレイムを打ち消す。改めて、この剣をくれた盟主には感謝しかない。

「使いこなしやがったな、レーヴエ！」

「何も外の理の剣を扱えるのはお前だけではない、沈め！マクバーン！」

「へえ……………熱いが我慢してみせろよソル・イラプション」

「なんだこれは！」

「ロストアーツ、失われたアーツだ。お前も、これには終わりだろうな」

巫山戯るな、俺は終わらない。彼奴に、

「ヨシユアに会うまではな！燃え盛る業火であろうと砕け散らすのみ…受けろ、剣帝が絶技・冥皇剣！」

「やってやるよ…オラオラ！こいつで仕上げだ！ジリオンハザード！」

「え！マクバーン、レーヴエ！」

「ちい、お前ら避ける！ティータ、行くぞ！」

「ティータちゃん、行くよ！」

「あわわわ」

「ラウラ、エリオット、フィー、今は隠れるんだ」

「わかった」「うん！」「了解」

「あはは、シャーリイでもこれは不味いかな」

「彼奴等アアア、巫山戯るんじやありませんわ！」

俺とマクバーンの技がぶつかり当たりなりに衝撃波が巻き起こる。木々は倒れ、俺とマクバーンを中心に大規模なクレーターが出来上がった。

「ちい、」：マクバーン！」

煙が晴れ、睨み合う俺とマクバーン。俺がもう一度ケルンバイターを構えようとした時、奴から思いも依らない台詞が出た。

「今回は…てめえの勝ちだ。レーヴェ、…今回はな」

「うーんと、僕も退散させて貰うね。」

マクバーンに続くようにカンパネルラも消える。マクバーンは俺と戦うのが目的だったのだろう。だが、カンパネルラが解らない。デュバリイの事だ、言いふらした挙げ句厄介なのに捕まったと言ったところか。

「此方は終わったが、お前達の方はどうやら厄介なようだな」

「レーヴェ、それだけか！」

「ハハ…剣帝のお兄さん、シャーリイじゃどうやっても勝てないかな。流石に切炎のお兄さんと渡り合うなんてできないし」

「かあああ…何なんですの彼奴等あ！勝手に付いてきた挙げ句勝手に帰りやがりましたわ！」

やはり俺の思った通りか。

「まあまあデュバリイも落ち着いて、速く帰りお菓子でも食べましようか？」

「ふっ、まだ幼いのだ。抱え込みはすべきではない」

「子供扱いするな！ですわ！」

「アイネス、エンネア久し振りだな。…一つだ、デュバリイの扱いは変えてやれ。今回、俺は彼女に助けられた。その行動は子供にできる事では無い」

「お前も五月蠅いですわ！」

そこから俺は傍観することにした。行動を起こしたいが、マクバー

ンに負わされた傷も深い。ここで戦っても、勝てはしないだろう。「赤い星座の連隊長ガレス、お嬢のお供に推参した」

これで奴等は5人、それでも此方は俺を含め8人。人数なら此方の方が有利だ。

「わーハッハッハ、このギルバート、応援要請に応じ助太刀」

「新たに3人か、デユバリイ。戦力に数えるのはどうかと思うぞ」

「あー、てめえ、雑魚いんだから来るなよ」

「うーんと……ごめんなさい。誰ですか？」

「あつ、ヨシユア君とエステルちゃんに倒された人！」

「五月蠅い！影の国で助けてあげたのを忘れたのか！それに僕は今や結社の強化猟兵の連隊長だ！」

「……ただだよ」

「カンパネルラ様に言われたから来たけど……勝てるかよこれ」

そう言っただけ増えたのは結社の強化猟兵が奴を含めた9人。少々、面倒になってきた。

「わーハッハ……こい！G・アパツシュ！」

その時だ。後ろの気が揺れた。

「ハッ、もらったぜ!!」

「おっと……」「むっ……」「あーれー！」

ギルバートは人型兵器の斧にあたりG・アパツシュが大破。何処かへと吹き飛んで行った。

「その声、VIII組のアツシュか」

「私達もいます」

「参る」

トールズ分校の制服を着た少年と少女がアイネスとエンネアを狙う。だがそれは安安と避けられる。

「……ほう」

「あら……？」

「くっ、雛鳥ひなどりのときが」

デユバリイがクラフトを使おうとした時、急に謎の兵器が現れた。デユバリイを襲う。彼女は瞬時に盾で受けたが、衝撃で思わず下が

る。しかし、アレは確か戦術殻と言ったな、昔博士が意気揚々と話していた。

「ぐ……黒兎……！貴女がいましたか」

「久し振りですね、神速の」

「アルティナ、クルトにユウナまで……！」

まるで茶番劇のようなものが繰り広げられる。似たような事が昔あったな、俺もかつてヨシユアに……。感慨深いものがあったが、それ以上に嫌な予感があった。

パチン

「なっ、なんだあ」

巨大な影が動き出し、人型兵器を吹き飛ばす。巨大な人形兵器だった。奴等が解説をしているが、それ以上にアガットの

「エステル達が戦った奴か」

その台詞が俺の耳にはつきりと聞こえた。あの二人が戦ったのか。ならば、俺が倒せない道理は無い。そんな時、八葉の青年。リイン・シユバルツアアが手を空へと掲げた。

「来い、灰の騎神ヴァリマール!!」

何だあれは、巨大な騎士人形が空を飛んでいる。

「ハハ、まさか演習地から飛んでくるとは」

アガットはあれが何か知っているようだ。後で話を聞いても良いかもしれないな、リイン・シユバルツアアからも。そこからは人の入る余地は無い。結社の連中も実験と称していた。俺も今は敢えて手を出すのは控えよう。奴等の実験が気になる。恐らくは博士も関与しているだろう。下手に動き、止めるのは不味い。

「あんなデカ物に1機じゃ無理があるわよ」

それに反応した少年があの人形兵器に乗って現れた。あの斧から換装したようだ。二刀流になっている。

「助太刀します」

「クルト、下がれ！機甲兵の敵う相手じゃない！」

「百も承知です！ですが見過ごす事はできない」

「話している場合か！避ける！」

何故俺は彼等と同じ力いやそれ以上の力を持ちながら戦えない。

「ふむ、中々面白い事をノバルティスはしているじゃないか。くく、良いだろうレーヴェ。君に新たな力をあげよう。■■■■の為にね」

俺が嘆いていると、まるでそれに鼓動するかのように俺の相棒とも呼べる存在が現れた。

「まつ、待ちなさい！何故アレも有るのですの！」

「デュバリイ、何故コレがここにあるの！アイオンだけのはずでしょうが」

「くつ、しかも我々も狙っているぞ」

「おいレーヴェ！てめえ……こいつと一緒に黄泉帰ってたのかよ！」

「さあな……だが俺の相棒であることに変わりない。ドラギオン行くぞ！」

ギヤアアア

機械音にも似た咆哮を上げ、ドラギオンが結社の神機に襲いかかる。

「よし、クルト行くぞ！」

「はい」

ドラギオン、灰の騎神、機甲兵だったな。3機の連携で神機を追い詰める。

「ふむ……これではレーヴェを黄泉帰らせた意味が無いな。マイルスターや13工房に頼んだ意味がない。神機よ、私の力でより……」

「ちよつと、神速さん？これ、博士から聞いてないよ」

「神機の暴走？……くつ、無差別攻撃！」

結社の神機が暴走を始め、手当たりしだいに攻撃を開始するのそれに巻き込まれたドラギオンが火花を散らしながら俺の前に横たわる。

「……ドラギオン、眠れ。俺の相棒よ」

「君は私のプレゼントを喜んでくれるかな？」

「何？」

ドラギオンが破壊されたと思ったが、急に光りだす。あの時の、まるで空の至宝の光だ。俺だけじゃない、アガット、アネラス、ティータは気付いた。

「ドラギオンが……騎神になった」

「まさか、空の至宝の欠片ですよ！それが剣帝に……」

「ならば、リイン・シユバルツァーはこうしていたな。だが、俺はこうだ、行くぞ、ドラギオン」

「ギヤアアア」

俺はケルンバイターを掲げるとドラギオンが咆哮を上げる。すると身体が謎の浮遊感に満たされ気付くとドラギオンの内部に居た。掲げたケルンバイターは巨大化し、ドラギオンが構えている。

「動けるのは一瞬か……」

あの時、ヨシユア達と戦い俺は2度破れた。一度目は死ぬ前、二度目は死んでからだ。俺は彼奴等の芯の強さ、それに負けた。今まで、孤独に戦い敵を殺す修羅として刃を振るってきた。だが、今は……奴等に会い成長を見てみたい。俺の選択が間違いじゃない事を教えてくれない。

「受けてみよ……絶技を越えし剣帝の一撃を……神技」

―レオンハルト、貴方が理へと至るとき、ケルンバイターは貴方に応じ、その技を放てるでしょ

「破空蒼魔斬」

理の外の魔剣であるケルンバイターだからこそ放てる一撃。空間を切り裂き、その存在そのものを理の外へと斬り捨てる。

「まさか……実験どころではありませんわ。剣帝、今は届きませんが次は必ず勝ちますわ」

「デュバリイ、何時でもかかってこい。そして言う、俺は必ずお前達のマスターに、第7柱に勝利する」

「我々も聞いた。その宣戦布告、必ずやマスターに」

「そうねえ……その時は私達鉄機隊が相手になるわね」

3人と結社のメンバーはツールズ分校の教員と生徒が合流した当たりで挑発し、消えた。まるで自分達の存在を誇示するかのようだった

た。

第6話

結社との戦闘が終わりを告げる。ドラギオンから降りる。すると、ドラギオンは人型から竜の姿へと変形した。

「……どうなってんだ」

「わ！わ！凄いですよアガットさん！レーヴェさん、分解して調べても良いですか！」

「……ティータ」

「……ティータちゃん、一旦落ち着こうね」

「……ティータ・ラッセル、話には聞いていたが……駄目だ。ドラギオンは俺の相棒なんぞでな」

そんな話をしていると、周りをツールズ分校の生徒及び教官達が取り囲む。それをアガット、アネラス、ティータそしてⅦ組が俺を守るように立ち塞がる。

「シユバルツアー教官、その男は事件の重要参考人だ。我々が確保する必要がある」

「ミハイル教官……待って下さい！彼は俺達を支援してくれました。紛れもない事実です」

「……リイン君」

「シユバルツアー……そいつは無理な相談だな」

何処からともなく軽薄そうな男が現れる。だが、俺の勘が執行者並の脅威であると告げている。

「おいおい、結社の奴等に挨拶しようと思ったのにな。どう言う状況だ？」

「……おい、なんでアンタが生きてんだ！親父と戦って死んだはずだろう！」

「おお！オルランドの息子か、それにフィー！久し振りだなあ」

「……ゼノ、レオ、知ってたの？」

「悪いなあフィー、これも約束なんや」

「ああ、黙っていた事には謝罪しよう」

西風の旅団メンバーとアガット達と同じ遊撃士だったはずだ。今、

俺への視線は無い。全てあの3人に向いている。ならば……

「ドラギオン！」

「ギヤアアア!!!」

ドラギオンの背中に乗り、空へと飛び立つ。色々と仕方がないが、やめだ。結社の計画には興味があるが今は危険すぎる。俺はリベール方面へと飛び立った。国境の頃にはアガットに対してメツセージをアークスIIに送っておいた。

ヨシユア、エステルに会おうと思う。アガット、アネラス、リベールでまた会おう。

レーヴェの野郎が飛び去った後、あの西風の3人も消えていた。帝国の奴等は俺達まで捕獲しようとしたが、フィーの持っていたスタングレネードで助かった。奴等の目を潰したすきに崖を降りてタイタス門へと走った。街道を離れての移動だ。時間もかかったし、リベールに着くまでが大変だった。

「おいおい、なんで案山子男がいるんだよ」

「いやあ……そりゃあな。いくら犯罪してないと言えど逃げたら捕まえるしかないだろう？」

帝国情報局の兵士が武器を構えて俺達を取り囲む。戦力差は丸わかりだ。これで下手に応戦でもしたら帝国のテイータにまで迷惑がかかる。

「…臆」

「なー」「ギヤー!」「カヒュ」

「あん?どうなって……」

目の前で帝国の奴等が片っ端から倒れていく。その場に立っていたのは黒装束を纏った俺達のよく知るアイツだった。

「まったく、遅いから駆け付けて見ればこんな事になっているなんてね」

「ヨシユア!お前……大丈夫なのか?」

「…アガット、僕は元々こう言う任務をしてきたんだ。隠密はお手の物だよ。それに、殺してない。峰打ちだから数時間もしたら起きるだろうね、早く移動しよう」

「ああ、助かったぜ」

帝国情報局を退けた俺達はなんとかリベールのハーケン門へとたどり着いた。

「あつ貴方達は！…すぐにモルガン將軍に連絡します」

「待つ待て、」

言うより先に兵士の男はモルガンの爺さんの所に行っちゃまった。はあ、怠い報告会かよ。俺はアネラスとフィーの方を見るが両方から、「頼む」と言った有り難くない視線を貰った。

「災難だったなクロスナー、しかしお前たちの帰還は嬉しく思うぞ」

「相変わらず硬いな爺さん。それよりも…聞いて欲しい。ロランズ・ベルガー又の名を剣帝レオンハルト」

「懐かしいな、それがどうしたと言うのだ」

俺は意を決してモルガンの爺さんに話した。勿論、ここにはヨシユアもいる。どう言う顔をするかは解らない。

「俺達はレーヴェエの野郎と一緒に結社と戦った」

「なんと！」「ありえない！」

ヨシユアは悲痛な叫びを上げる。俺もわかってた、ヨシユアにとって彼奴は兄同然なのだから。

「ヨシユア君、本当なの。レーヴェエさんは生きてる、そしてアガット先輩！レーヴェエさんに連絡しましょう！」

「あつ、そうだな」

俺はアークスIIを取り出し、ヨシユアとモルガンの爺さんが見る前でレーヴェエに連絡を取った。

「アガットか、丁度いい。リベール空軍に見つかった、適当な位置で捕縛されようと考えている。おそらく裁判が起こるだろう…すまない、ヨシユア達を」

「…レーヴェエ！」

「何？」

「なんで…なんで生きて…」

ヨシユアは泣いていた。死んだと思った奴が生きていたんだ。当たり前前だろうな。

「気が変わった。リベール空軍は振り切る、アガットお前達は恐らくはハーケン門の近くだな」

「当たり前だ。流石の状況判断力だな、剣帝」

「…ふつ、モルガン将軍か。ハーケン門の一角を開けておいてくれ、俺はそこ着陸する」

通信を切った俺は追手に対してドラギオンを向ける。たったの2機だ。どうとでもなる。

「…エンジンに損傷を与えるだけでいい。ドラギオン、行け！」

「ギヤアアアア」

あの時の様にドラギオンの背中でケルンバイターを構える。あの時と違うのはアルセイユでないこと、そして2機と言うこと。だが、俺にとっては関係ない。

「……はあー」

ドラギオンとのすれ違い様にエンジンに傷を入れる。黒煙が出ている以上、あの2機はコチラの追跡を断熱せざる得ない。

「…俺も優しくなったものだな」

ドラギオンの背中に座りながら、空を見上げる。夕焼けに染まるリベールの空は相変わらず、綺麗だった。

時間が過ぎ、ハーケン門が見えてくる。兵士達が武器を構えているが、一人の老人は堂々と俺達が着陸しようとした位置に座している。

「ドラギオン、助かった」

「ギヤア」

たった数時間だが、ドラギオンに意志があるのがわかった。かつての人形兵器ではない、れっきとした意志が存在している。

「…剣帝レオンハルト、先ず聞こう。おぬしは黄泉がえり何をする」

「……俺は人を信じると決めた。黄泉帰ったからには、俺はその

未来と今を見てみたい、それに……お節介な弟にも挨拶をしなくてはいけないからな」

モルガン將軍は悟った様に自慢のハルバートを構え、俺に向ける。
「その言葉、しかと受け取った。だが、真実であるかは否、その刃で語れ」

「ふっ、良いだろう。行くぞ、武神！」

「来い！ 剣帝！」

クラフトなんてない。ただ刃と刃のぶつかり合い、武人として剣士として、俺達はただ戦った。打ち合う事に鋭さを増す一撃、俺も同じように速度を上げる。ハルバートの一撃が重くなる、ならば俺もケルンバイターに力を入れる。

「うむ、素晴らしいのだがこれまで」

「こちらの台詞だ！」

振り下ろされるハルバート、振り上げるケルンバイター。ぶつかりあつた瞬間、モルガン將軍のハルバートの刃が砕け散つた。

「…ぬう、流石剣帝だな」

「嫌、俺もまだまだだ」

そう、ケルンバイターにも罅が入っていた。小さな罅だ、理の外の魔剣であるケルンバイターなら、今の生きているケルンバイターなら気付かないうちに修復されるだろう。だが、ケルンバイターに罅を入れた。入れられた。マクバーン、鋼の聖女にもされなかった。

「……俺はどうだ」

「…ふっ合格だ。皆の者、ここに居る者は我がリベール軍の盟友だ。
…総員……敬礼！」

ザツ！ 空気をきるおとが聞こえた。俺を囲んでいた兵士達は一斉に敬礼をし、礼砲まで上げている。流石にこれには驚いた。俺はかつてリベールを襲撃し、多くの被害者を出した。それを…

「一つ、済まなかった。国を守る為、俺等はお前達を犠牲にした。他国のといえど、民間人を見捨てたのだ。軍人として…人として我々はどう償えん。だから、せめてお前達は生きてくれ。この…未来をな」

モルガン將軍の目には謝罪と決意の目があつた。俺も、同じ物を見てみたい。鋼の聖女とは別に、俺が尊敬の念を抱いた人物だ。

「モルガン將軍、よろしく頼む」

「うむ、ならば……すまぬが王都グランセルへと我等の飛空艇で向かってほしい。陛下も、おぬしと話したいとおっしゃった」

リベール女王、そうだな。俺も……言葉を交わさなくてはいけない。

「わかった、全員で向かって良いのだろうか？」

「ふっ、そうだな。おぬしと話したい者もいるだろう、今の時間を大切にすることだ」

俺は案内されるまま、飛空艇に搭乗した。

第7話

数時間の旅だ。高速艇という訳ではなく、リベール軍の輸送船を借りてのものだからな。中はある程度、結社の戦闘艇に比べれば居住性もある程度はマシだ。

「いつまで隠れているつもりだ……ヨシユア」

「……レーヴェ…なんだよね」

ヨシユアの瞳は信じられない物を見ているかの様だ。まあ、リベールアークで俺は死に、影の国で完全に消滅した。だが、俺はこうして立っている。

「…ヨシユアお前は……いやすまない。お前に会いもう一度話そうと考えていたが……こうしていると言葉が浮かばないな」

「……レーヴェ、優しい笑顔だよ…あの時みたいな…」

ヨシユアと会い、喋っただけだった。だが、俺の頬に少なからず雫が垂れる。泣いているのか…俺は、いや嬉しいのか。

「ふふ…レーヴェ、泣いてるよ」

「泣き虫に言われるとは……俺も焼きが回った、ぐっ」

急に身体中が激しい痛みにも襲われる。まるで中から破壊されるかの様に激痛が襲う。

「ぐは」

大量の血が吐き出され、それを見たヨシユアが慌てて助けを呼んでいる。

「レーヴェ、大丈夫だから！すぐに医者か…」

「ぐうう…うあ…」

「…レーヴェ！その姿は」

身体が何かに変貌しようとしている、駄目だ。それだけは

「ヨシユア、俺を…斬れ！」

「待って！…まだ再会したばかりなのに…」

「クククツ…しかし、まだ早いな。ヨシユアの絶望する姿を見るのは

もつと……ほお」

「レーヴェ、大丈夫。私が付いているから」

「…なに」

「！……姉さん」

レーヴェが突然苦しみだして影の国の黒騎士の様な姿に変貌しようとした時、僕は奇跡だと思った。僕の前に良く知る女性が現れてレーヴェを助けてくれた。

「ヨシユア、レーヴェをお願い。…助けてあげてね」

「……」

何も言えなかった。一瞬の出来事だったし、でも確実に言える。あの人影は姉さんだ。姉さんは死んでもレーヴェを守り続けているんだ。

「…っ、俺は」

「レーヴェ、取り敢えず休んで！」

僕は立ち上がろうとするレーヴェを無理矢理座らせる。すぐに飛行艇の船医が来てレーヴェを診察してくれた。一緒に来たアガツト達も心配そうにレーヴェを見ているけど、船医の診断は以外なものだった。

「…健康体そのものです。しかし、あくまでも今ある機材で調べてです。……それ以上の検査はグランセルに行かなくてはわかりません」

レーヴェは今死んだように眠っている。生きているのはわかったけど、その姿はリベルアークの時みたいだ。せっかく…せっかく会えたのに、また…。

(…姉さんレーヴェは必ず助けるから)

レーヴェを寝かせた僕はグランセルまでの足を早めた。もし、何

かあれば大変な事になるから。

「ヨシユアー！」

グランセルの軍港について直ぐ、僕の恋人が抱き着いてきた。アガットとアネラスさん、フィーから温かい目を向けられて僕は恥ずかしくなってしまうた。

「…エステル、今この体勢は恥ずかしいんだけど」

「?…なん…げっ!アガット!」

「げ!…ってなんだ。げ!…って…まったくBまで上がっても結局代わり映えしねえなあ、エステル。クロスベルから戻ってきてても…」

「五月蠅いわよ!いいじゃない…アガットはティータに会えたくせにさ。まったく、オリビエもオリビエよ!どうせなら私達も入れなさいっての!」

エステルが暴走が始まってしまった。僕は急いで彼女を宥める。

「エステル、今帝国の実権はあの鉄血宰相にある。いくらオリビエさんが皇子でも、そこに割り込むのは難しいんだ」

「う…わかつてるわよ。オリビエも頑張ってるのは」

エステルがシユンとしてしまった。僕も気持はわかる、ティータは君にとつても妹の様な存在だし…エリカ博士の相手を押し付けてしまったのも

「…アガット・クロスナーアアアア!!」

「エリカ!」

「シイイネエエエエ!」

「おい!オーバルギアII?てめえ!破棄したんじや無かったのかよ!」

「私のティータを危険な目に合わせて貴い様ああ!」

「おい!ヨシユア!エステル!アネラス!フィー!誰でも良い!助けて!おい!」

僕達は見ても見ぬ振りをしてしていると、エステルが驚いた顔で後ろを見ている。

「エステル・ブライト、ヨシユアをここまで支えてくれた事、感謝する。これからも、ヨシユアを支えて欲しい」

「あ……あんですって！ヨシユア、なんでレーヴェエが生きてるのよ！まさか、また結社の実験!?どうしよう！この場合ってケビンさんに連絡すればいいの?!でも、レンもきつと会いたいだろうし……」

「慌て過ぎだよ、それよりもレーヴェエ、まだ寝てなくちゃ駄目だよ」

「関係ないな、俺に休息は必要ない」

僕の言葉への返事は何時もと変わらないようでもあつたけど、僕にはわかる。レーヴェエは無理をしてる。

「…レンか、元気にしているか?できれば挨拶をしたい」

レンの名前を出した瞬間、レーヴェエの表情に影が見えた。それは結社にいた時からの負い目なのか、それとも別の理由なのからは僕には解らない。

「ジェニス王立学園にいるわよ。会いに行つてあげたら?」

「…そうか、ブルブランと彼奴が迷惑をかけたな。(しかし、あの男……カンパネルラか)」

レーヴェエは最後の方を小声で言ったつもりだろうけど、僕にははっきりと聞こえた。

(カンパネルラ?まさか彼が動いているの?)

僕達(執行者)にとつてカンパネルラの名前は大きい。盟主の代行No.0。純粋な戦闘能力なら僕が上だ。でも…勝てないだろう。

「今はお城に行こうよ。女王陛下も待つてるし」

今は考えてる場合じゃない、僕は遊撃士だ。今は今だけは素直にレーヴェエの帰還を祝福しよう。

俺達エステル、ヨシユア、アガット、アネラス、フィーの6人は謁見の間に行った。周りには見覚えのある顔が大勢いる。中でも一番の視線はあの女、カノーネだ。リシャールを操った俺を憎んでいるのだろう。だが、何故カリシャールは笑顔を浮かべているが。

「久し振りですね、剣帝レオンハルト」

「…ハーメルの事を聞いた。帝国に交渉してくれた事、ハーメルに居た全ての命に変わり感謝する。俺よりも先に死んだ奴等にとつて、ヨ

シユアが献花してくれた事は嬉しいはずだ。……ありがとうございます」

俺は跪いた。全ての感謝を伝える為、まだ顔は合わせられない。俺はハーメルの悲劇を忘れない。だが、今を生きる者達の為には、俺の恨みなど些細なものだ。

「いえ、ハーメルの悲劇を…国民の為とはいえ帝国と協議し隠蔽したのは私達でもあります。貴方の怒りは最もです。ここで貴方が私を討とうとも、この国の兵士は貴方を捕らえることは致しません」

「あつ！あんですつてえ！クローゼ！どういう事なのよ！」

クローゼ、クローディア妃殿下か。影の国でも、あの剣さばきは記憶に残っている。

「陛下はこの再会で、ご自分の罪を命で償いこともじさないと、おっしゃいました」

「巫山戯るな、一国の王がただの復讐に命を差し出すだと？俺は確かにリベールが憎いたが、それでも俺はこの国を…人を信じると決めた。それに…ヨシユアの恩人を殺したくない」

これは俺の本心だ。それを信じるかはこいつ等次第だがな。

「ありがとうございます」

女王との謁見は終わった。もう、ここに用はない。今はレンに会いそして……

気付くとバルコニーにいた。俺が、ロランス・ベルガーとしてエステル達と戦ったこの場所。未だに鮮明に覚えている。

「ぐう…」

身体中から張り裂ける様な痛みを感じあの時の様に血を吐く。

「おいおい、そんな体でどうするつもりだ？」

「…カシウス・ブライト」

「影の国では会わなかったな、こうしての再開を祝いたい。どうだ？小さいが、宴会が開かれているぞ？」

カシウス・ブライトか俺に何を言いたいのかは知らん。だが、無用なお節介をやこうとしているのはわかる。

「ヨシユアの事は感謝している。だが、俺に関わるな」

「嫌われたものだな、だが俺の息子の為にもだ。お前を気絶させて病院に運ばせて貰うぞ」

「来るか、劍聖！」

「悪いなあ、今は棒術なんだ！」

一撃だった。普段の俺なら簡単にいなせるはずの一撃が俺の腹に入る。

「ぐ」

「今のも防げない、その状態でどうするつもりだ？ 劍帝、お前の事を考えている弟分の事を忘れるな？」

「…肝に銘じ…よう」

俺は意識を失った。これがさらなる異変に繋がるとは俺は思ってもみなかった。

第8話

見覚えのある天井だった。王城の一室だろう、カシウス・ブライトに倒された俺は恐らくこの部屋に運ばれたのだろう。だが：何故だか懐かしいと感じてしまう。ん？懐かしい、何を言っているんだ。ここはハーメルンの俺の家だろうに。

「レーヴェ、レーヴェったらー！」

「カリンか、まったく…」

幼馴染みのカリンが泥だらけになりながら俺の家の扉を叩いているのが見える。弟のヨシユアの姿は無く、慌てているのだけがわかる。

「レーヴェ：…どうしよう。ヨシユアの大切にしてるペンダント、どこ探しても見つからないの！お願い！探すの手伝って！」

「馬鹿だ…」

弟の宝物を何故無くす？俺はカリンの行動に対して頭を抱えた。ヨシユアは俺にとつても大切な弟分だ。：泣き虫なのが玉に瑕だが。それで、どんなペンダントなんだ？

「うん、本当に細かくだけど風属性のセピスが付いてるやつ。お願い、手伝ってください！」

俺はそれを聞いて余計に頭を抱えた。それはあの泣き虫のヨシユアが自分で魔獣を罫にかけ、倒した時に入れた物で作ったカリンへの誕生日プレゼントのハズだ。

「まったく…お前という奴は」

「だからお願い！」

ここで無視して二人の仲が拗れるのは不味い。俺は、…待て、何故カリンが生きている。カリンはあの時殺されたハズだ。

「もう良い」

「え？レーヴェ、どうしたの」

「ルシオラ！お前しかいない、ここレベルの幻術を俺に仕掛けられるのはな！」

「レーヴェ?!」

「消えろ、カリンは……もう居ない」

何処からか現れたケルンバイターでカリンを斬る。流れ出る血も本物の様に感じるが、世界が暗転し、王城の一室で目覚めた。

「…ルシオラとブルブランか」

「ふっ、完璧に気配を消したのだが。流石だな、我が友は気付くか」

「あら、速かったわね。どんな方法で帰ってきたの？」

「俺の心の弱さを消しただけだ」

カリンは死んだ。だが、俺とヨシユアの思い出の中で生きている。それでいい、それで良いんだ。

「そう、改めて久し振りね。レオンハルト」

「君が生き返った話を聞いてね、私は居ても立っても居られず、幻惑の鈴と共に来たのだが。どうやら、面倒な事になっているようだ。友よ、いやレーヴェ。君のその姿、まるで火焰魔神のようだ」

ルシオラが気を利かせ鏡を渡してくる。そこにはあの黒騎士の姿が映っている。

「ぐっ」

ドクンと俺の鼓動が響く。すると、あの姿から普段のコートに変わった。

「まるでリイン・シユバルツァーの力の様だ。…彼は姿まで変わりはないがね」

リイン・シユバルツァー、帝国で出会った八葉の使い手か。

「ところでレーヴェ、貴方はこれからどうするの？」

「さあな、少なくともハーメルでの借りがある。結社の幻焰計画か、あれを打ち砕こうと考えている」

俺の言葉にルシオラは目を見開き、ブルブランは笑った。

「貴方は、一人でも戦うつもりなの？」

「ククツクハハハ！流石我が友だ、良いだろう。私は君を最大限支援しよう！」

その時だ。間が悪すぎた、話し込んでいた俺達の部屋に遊撃士達が入ってきた。

「なっ！てめえ、怪盗紳士！」

「あははっ、少し予想外だね」

「あっ！あんですつてえ！」

アガット、ヨシユア、エステルは驚きの声をあげる。特にアガットに至っては重剣を何時でも抜ける様な体制にいる。

「久し振りだね、ルシオラ、ブルブラン。福音計画以来かな？」

「そうねえ、MWLで占い師してた頃は貴方と彼女は訪ねて来なかったもの」

「私は何度かリベールやクロスベルにお邪魔していたが、君達は教団とレンに熱心だったからな」

アガットと今戦うつもりが無いと悟ったのか、体制を解いた。

「ルシオラ、確か幻惑の鈴だよな？シエラザードの奴が探してたぜ」

「……そう、でも合う訳には行かないわね。私はシエラザードにとつて仇でもあるのだから」

「そんな！シエラ姉はそんな事おもってないわ、ルシオラお姉ちゃん！」

「……そうね、シエラザードならきつとそう。でも、私は駄目なの。だから、ごめんなさいね」

シエラザードがそう言うのと濃霧があたりに現れる。

「うそつ、これってロレントの時の！」

「ルシオラ！まさか、まだゴスペルがあるの?！」

「ヨシユア、違うわ。ゴスペルはない、でもこの王城一つに幻術を起こすのは造作もないわ」

「くつ、ロレントには行ってねえが……くそ」

アガット、エステルが倒れ残るはヨシユアのみ。

「……ブルブラン、ヨシユアは連れて行く。レンの所までな。そこで改めて話をしたい」

「良いだろう、来るかヨシユア」

「……わかった。レーヴェが何をするのか、僕も知りたいからね」

王城から抜け出すのに苦労は無かった。全員が幻術にかかり朝まで目覚めることは無い。俺は堂々と、バルコニーに相棒を呼んだ。

「来い、ドラギオン」

「ギヤアアアス」

機械の咆哮が轟く。そして、バルコニーにドラギオンが現れる。

「ドラギオンの背に乗れ」

全音に乗ったのを確認し、ジェニス王立学園に向かった。

「まだ明かりが付いているんだな」

「ああ：私の時もある程度起きていた。しかし、懐かしい。我が美のライバルとの出会いの地へと再び舞い戻る事になるとは」

バレてしまう前に旧校舎にドラギオンを下ろす。そして俺は行動に移る。

「レンを呼ぶ。猛れ、ドラギオン！」

「ギヤアアアアア！」

凄まじい咆哮、あたりにそれが響く。警備がいるのなら、真っ先に来るだろうが：誰よりも速く彼女は現れた。

私が鎌の手入れをしていると、結社の人形兵器の叫び声が聞こえてきた。私を呼んでいるのだと思う、学園の制服のまま飛び出したわ。「レデイを呼びつけるなんて、おかしいんじゃないの？あー、ヨシユア。エステルと違ってブルブランにルシオラ？結社にでも戻るつもりなのかしら」

「違うよ、レン。仕方ないけど邪魔はされたくないし、ルシオラ、幻術を頼める？」

「安心なさい。既に出してあるわ、学園の人間は朝まで起きることはないわ」

かつて福音計画を共に行った執行者達が私の前にいる。ヨシユアは違うけど、同じようなモノね。でも、ヨシユアが会いに来るだけなら明日訪ねてこれば良いだけ、今なんておかしな話よ。

「流石の仕事だな。ドラギオンを隠す理由はなかった訳か」

聞き覚えのある声、二度と聞けない声。私はそれに向かって鎌を振るった。

「一撃の鋭さは変わらないな。久し振りだな、レン」

「気安く呼ばないでくれる？そう、あなた達は博士が作ったのね、きつと偽物としてでなければ」

「お前を引き込んで…すまなかった。お前を執行者にしたのは俺が原因だ。お前の怒りは…最もだからな」

私は鎌を投げ出した。そして偽物や本物なんてかんげなく、レーヴェに抱きついた。

「…なんで…なんで…その姿なの…レンは…レンは…レーヴェも大好き…だった…のに」

泣く私の頭にレーヴェは手を乗せ、ただ一言。

「すまなかった」

と言ったわ。泣き止んで、改めて話をすると思いきの連続だったもの。涙なんて一瞬で乾いたわ。

「レーヴェ、その身体大丈夫なの？」

「解らないとしか言えないな。自分の意志で黒騎士の姿に変われるが、激しい痛みが代償と言うのは戦闘面で困る」

そう言つてのけるレーヴェに呆れつつも、レーヴェの目的を聞いて私も協力する事にした。

「ヨシユアはどうするの？エステルと離れる事になるけど」

「うん、でも今回僕は漆黒の牙として動く。レーヴェを助けたいからね」

ヨシユアの瞳には覚悟が見えたわ。私も殲滅天使として頑張らないとね。

「ふふつ、ならば…目的地は魔都をオススメしよう。彼の地で結社はある実験をするらしい。魔女からの押し売りだがね」

「…ヴィータか」

また懐かしい名前が出てくるわね。魔女さん、レーヴェの事好きだったようだけど、跳び上がったたりするかしら？

「5月にはクロスベル入りしたほうが良い。それまでは、しばしの休養だ」

「…わかった。ヨシユア、俺はルシオラ、ブルブランと行動を共にする。時が来れば、迎えに行こう」

「ええ、まったく大変な事しかないお兄さんだこと」

「…エステルの説得は期待しないでね」

ヨシユアの弱々しい声を聞いたレーヴェエはあの時の様に笑ってドラギオンで飛んでいった。

「さてヨシユア、私もエステルの所に行かせて」

「レン？」

「旅支度ぐらい自分でするわ、それともヨシユアは私の私物品も管理したいのかしら？」

「…もう」

ふふっ懐かしいわね。結社の時みただけど、あの時よりもずっと楽しい。レーヴェエ、私を助けてくれた借りは返すから。

第9話

「しかし、生きてたとはな。ジヨゼットの話じゃ影の国で消滅したって聞いたけど」

「かつてお前達を利用した男に対して、少し呑気過ぎるのではないかな？ドルン・カプア、キール・カプア」

今俺達はカプア宅急便の山猫号に乗艦している。俺と関わりがあり、ヨシユアの推薦で選んだがまさかあれから事業を拡大しているとはな。

「確かにな、でもよ。俺達はリベールであった事はある意味思い出になってるんだ。あれがあったから、王女様から恩赦も受けれたし山猫号も帰ってきた。犯罪者としてじゃなくて普通の人として、表を歩けるしな。だろ？ドルン兄」

「ああ、確かにお前と俺達はあった！でもなあ！既に終わった事だ！…だからなお前も気にするなよ」

ふっ、まったく…俺もこんな仲間がいれば間違いを犯す事も無かったんだろうな。

「レーヴェ、ドルンさんとの話は終わった？」

「よお、ヨシユア！今終わったところよ！」

「よっ！あの時より良い顔してるじゃないかヨシユア！」

「ドルンさんも、キールさんも、茶化さないで下さい。誰でも死んだと思っていた兄弟が帰ってきてくれれば嬉しいですよ」

兄弟か、嬉しさと何だろうな。長らく抱いた事のない感情だ。そして、俺は笑う様になった。自分でもわかる。結社の時の様な俺の心は癒やされている。

「友よ」

「ブルブラン、俺の事はレーヴェで良い」

「そうか、ではレーヴェ。もうすぐクロスベルだ。帝国の対空レーダーはルシオラの幻術で騙せるが、何処に着陸するかは考えてあるのか？」

「ヨシユアから話を聞いてな。開けた位置がある、そこに着陸地点に

しようと思っっている」

ヨシユアの情報を聞いた俺は仲間の安全の為に帝国軍に対して陽動を仕掛ける事にした。

「先に俺は出る。帝国軍の警備を軽くしてこよう」

「あはは、レーヴェ。お手柔らかにね」

「安心しろ、あまり殺しはしない」

俺は山猫号のハッジから飛び降り、ドラギオンを呼んだ。

「ギャアアアス」

姿を見られる訳には行かない、すぐさま姿を変化させる。

「ふっ、黒騎士が相手になる」

帝国軍を煽り、すぐに発見される。

「ともに行くぞ、ドラギオン！」

ドラギオンを上昇させ俺は背から飛び降りる。

「はあ！」

「何だ！」

「エンジンが、、エンジンが動きません！」

すれ違いざまにエンジンを斬りつけ、航行不能にする。あの時はド

ラギオンの背に乗りながらだったが、今は…

「ふっ…」

「対空砲撃で！」

何機も斬りつけていると陸上戦力も出てきた。だが、その程度で俺とドラギオンは倒せん。

「ドラギオン、お前はそのまま空を排除しろ」

「ギャアアアス」

俺はドラギオンの背からの飛び降り、帝国の機甲師団の前に立つ。通常の人間なら死ぬ高さだが、俺にダメージは無い。

「撃て！」

機甲兵、戦車、その程度で俺は止まらん。

分見を使い今回は6人になる。

「受けてみよ、黒騎士の一撃を！」

6人の俺が同時に鬼炎斬を放つ。戦車、機甲兵、全てが爆散しあた

りを鉄屑へと変貌させる。

「くっ黒…騎士」

生き残った女兵士が俺を睨む。TMPと書かれたその軍服は血にまみれ、煤けている。

「レーヴェ、陽動はもういいよ。僕達はクロスベル市に入った。後は離脱して！」

「…わかった。運が良かったな。ドラギオン！」

ドラギオンを呼び背中に飛び乗る。ドラギオンは多少ダメージを受けていたが、機神と化した事で手に入れた自己修復能力ならすぐに直る。

「ドラギオン、お前は自身の判断で行動しろ。呼び出す必要があれば、呼ぶ。それまでは自由だ」

「ギャアアアス」

魔都クロスベルの直上で俺は飛び立った。ドラギオンはそのまま何処かへと飛んで行った。

「ふっ」

着地までに姿を戻す。ついたのは真新しい廃ビルだった。さつさと飛び降り闇に紛れる。

「あら、レーヴェは支援課のお兄さんのビルに降りたのね」

「支援課？なんだそれは」

「特務支援課、ここにいる僕等は少なからず関わりがあるんだ」

ヨシユアが懐かしむ様に話す。そうかお前の友人なんだな。

「まずは拠点が必要だ。俺はクロスベルには任務以外で来た事が無い。何処か拠点になる様な場所はないか？」

「うくん…ローゼンベルクのお爺さんならどうかしら」

「マイスターか…現在のクロスベルに居るのか？それ以上に、13工房か。アレは結社と関わり深い…」

「わかったわ。レンはお爺さんの方を訪ねてみるわ。レーヴェ達とは別行動ね」

「…今更お前にかける言葉では無いが、気を付けろよ」

「ええ、ここ（クロスベル）にはレンの大切な者があるし」

レンはそう一言述べると、クロスベル市内へと消えた。

「なら、私はミシユラムの伝手を使ってみるわ。クロスベルにいた頃に世話を焼いてあげた人がいるし、期待はしないで」

ルシオラは幻術を使い俺達の前を離れた。

「拠点ではないが、私は情報を集めてこよう」

ブルブランは転移の魔法を使い離れた。奴も。ヴィータとは別な意味で魔法使いだな。

「あまったのは俺とヨシユアか」

「…クロスベル。レーヴェ、一度港湾区に行こう。伝手じゃないけど、クロスベルを良く知る人達への足掛かりならあると思う」

「わかった。行こう」

俺はヨシユアに連れられ港湾区に連れてこられた。ミツシーと言う鼠か猫のキグルミが客寄せをしている。

「ここだよ」

「黒月（ヘイユエ） 貿易公司」

たしかカルバードの頂点に位置するマフィアだったはずだ。結社の頃に何度か相手をしたこともあったな。

「失礼します」

「ほお、珍しいお客様ですね。お久し振りですヨシユアさん、ソチラのお方は初めてでしたね」

「レオンハルトだ。単刀直入に聞こう。《銀》は何処だ？」

「レーヴェ?!」

「カルバードの黒月には《銀》と言う凶手がいたはずだ。ヨシユア、恐らくだが現代の《銀》がお前の言う足掛かりなのだろう？」

「フフフツ、素晴らしいですね。剣帝レオンハルト。死んだという情報は間違いのようですね」

この男、始めから気付いていたな。黒月は帝国にも耳があると考えた方が良くもいけないな。

「《銀》の居場所。良いでしょう、貴方方が居れば面白い事になりそう。クロスベルにはジオフロントと呼ばれる地下施設があります。そして現在ラインフォルト社クロスベル支部となっている場所には

特務支援課に在席していたメンバーが研究員として活動しています。私の言葉は：ヨシユアさん。貴方ならわかりますね」

俺はヨシユアとアイコンタクトを取り、共に頷き合う。

「うん、大丈夫。そうだ、今夜は気を付けてね。帝国軍が騒がしくなるかもしれないから」

「……わかりました」

黒月との会話は終わった。目的とは違うが面白い情報が手に入り俺は夜の作戦を考える為、ヨシユアと宿を取った。東方人街の宿だ。仲間達にそれをアークスで伝え作戦会議へと移った。

そのシスターは見ていた！

クロスベル中央区を一人のシスターが歩いている。カゴいっぱいパンを持ち、大きなバケットを可愛らしく頬張る。

「ん〜ふうひつのふほふへふははいほふへ」

(ん〜休日のクロスベルは最高ね)

彼女は従騎士として一人の騎士を支えている。今日は休日でありパートナーに無理を言い、わざわざクロスベルのパンを食べに来たのだ。彼女が食べながら移動し、カゴからパンを取ろうとするが入っていない。

「はあ、美味しかったな」

残念がりながら空を見上げるとかつて影の国で退治したドラギオンが飛んでいた。そして背中から忘れるはずのない姿、黒騎士が降りてきた。黒騎士は途中で姿を変え、支援課のビルに着地。教会騎士として、彼女は訓練されている。バレない位置から、その姿を確認した。

「剣帝」

黒騎士の正体であり、既に死んだ男性。死人とは思えない。後をつけると怪盗紳士ブルブラン、幻惑の鈴ルシオラ、殲滅天使レン、漆黒の牙ヨシユアが立っていた。各人はそれぞれ何処かへと移動した。彼女はすぐに端末を開き、パートナーに連絡した。

第10話

「ふむ、ならば……私が誘拐でもしようか？一番手っ取り早い事ではある」

ブルブランの返答に悩みながら周りを見る。ルシオラは微笑むだけだが、ヨシユアとレンは口を開いた。

「あら、ならお茶会はどうかしら？私が招待状を

出してあげましょうか？」

お茶会か。リベールの時を思い出す。確かにブルブランの謎解きよりもレンのお茶会の方が特務支援課と会うのには良いかもしれない。

「どちらにしても誘拐は変らないね」

「違うわ。レンとヨシユアがいれば支援課の人は事情を察してくれるはず。レーヴェ達は駄目だけど、レンとヨシユアだからお茶会ができるのよ」

「ならば、俺は帝国兵を集めよう。総督府で戦えば嫌でも集まってくる」

「レーヴェ、気を付けてね」

「なら私とブルブランでラインフォルトに幻術をかけましょう。レンとヨシユアを回収したらレーヴェ貴方の回収に向かうわ」

レンの言葉により夜分ラインフォルト襲撃計画は完成した。俺達は食事を取り、夜が更けるのを待った。

レーヴェSide

剣帝は一人路地裏に居た。月下に照らされその姿を変える。禍々しくも信念を思わせるその姿に。

「民間人に被害は最小限に」

罪もない人間を殺すほど俺は落ちぶれてはいない。そんな事をすれば修羅でもない、ただの人殺しに成り下がるだろう。それは認めない。俺はケルンバイターを抜き、月光に照らされたその刀身を見る。まるで、俺を悲しむかのように青白い輝きが起こる。

「済まないな。折れて……それでもう一度俺の手に戻ってくれた。その

力、借りるぞ」

ケルンバイターはまるで領く様に輝きが消えた。

意思があるのか等はどうでもいい。死人であり、黄泉帰った俺にとつて無意味なことだ。

「総統府、警備は少ないな」

「貴様、黒騎士！」

俺が現れるとゾロゾロとまるで虫の様に敵が現れた。斬りかかる者は腕を斬り落とし、銃を撃つ物はその銃を奪い、肩に弾丸を撃つ。「殺しはしていない。ただ、重症になるだけだ。手当が遅ければわからんがな」

悲鳴とうめき声の中を進む。黒騎士の状態では傷は速く治る様だ。かすり傷が何箇所ができたのだが、すぐに塞がっていた。

階層を上がるにつれ、兵士の動きが段々と良くなっている。これは優秀な指揮官が居るようだ。そいつを制圧なり、重症なりすれば任務完了だ。

「ふむ、君が件の黒騎士か。一体何用かな？」

兵士達が護っていた部屋の中では金髪の男が騎士剣を帯剣し待っていた。

「このクロスベルの混乱と災厄……と言えば納得か？」

「……良いだろう、私が総督を務めるクロスベルでの蛮行はこれ以上許す事はできない」

「お前、名前は」

「ルーファス・アルバレア」

「…黒騎士」

俺のケルンバイターについてくる剣撃。実力は間違いなく執行者並だ。だが………遅い。

「くっ」

「しっ」

仕留めたと思っただが、ルーファスはぎりぎりで身を翻し、致命傷を避けた。この狭い部屋での身のこなし、普通の剣術を極めたものではない。戦い一つも全てを把握し、自分に利用する。恐ろしい存在だ。

「そろそろ私の勝ちだ。黒騎士殿、貴方を確保させて頂く」
「無駄だ」

扉の外には何人もの気配がする。恐らくは、俺を捕まえる為だろう。しかし、その程度で俺が捕まると考えている方がおかしい。

「止まりなさい黒騎士」

「無駄だと言ったのがわからないか」

ケルンバイターを構え闘気を纏う。そして

「あの青年の技だが、受けてみよ。八葉一刀流」

「まさか、リインさんの」

「これは以外だな」

「七の太刀・落葉」

リイン・シュバルツアールだったな。他流の技だが、使いやすいものだな。

「さて、目的は達し」

「まっ！待ちなさい！」

俺は目の前のガラスをケルンバイターで割り、暗い闇に飛び出した。

「ドラギオン」

「G A A A A」

俺の目的は達したが…ヨシユア達か。世話の焼ける弟だ。

「ヨシユア、乗れ！」

「レーヴェ?!」

「あら、真っ赤っ赤ね」

「レンちゃん、ヨシユアさん待ってください…結社の人形兵器?!」

ヨシユアSide

爆発音や銃声がそこら中から聞こえてくる。クロスベル警察の人は市民の避難を進めている。

「ヨシユアも手伝いたくなっただのかしら」

「うん、でもクロスベル警察は僕達が思っているよりすごいさ」

「そうね、なんとと言ってもあの支援課さんたちの仲間だもの」

そして見つけた。支援課が解散されてもたった一人で避難誘導している少女。いや、隣には変わった人が…

「ねえ、あの人。ラインフォルトの次期社長のお姉さんじゃなくて?」

「あはは、これは以外だな。まさか、彼女もいるなんて」

「もう、こう言うのも調べておくべきでしょ? レーヴェもヨシユアも抜けてるんだから」

「…返す言葉もないよ」

レンの辛辣な言葉を受けつつも、僕は避難が完了したラインフォルトビルの前にたった。フードを被って二刀流の青年に大きな鎌を構えた少女。警戒しないはずなもの。

「あなた方は引退した筈ではないですか? N O。 XⅢ漆黒の牙、N O。 XⅤ殲滅天使」

「結社の執行者?!」

「レンちゃん?!」

「支援課のお姉さん…うゝん私からしたら支援課のお姉さんってあの胸の大きなお姉さんのよね」

「な! 私だってないわけじゃないです! それにロイドさんにも! ……あつ」

「へえ…支援課のお兄さんにも…なに? レン、教えて欲しいな」

「レンもテイオさんも…はあ。エステルが居なくて良かったよ。居たらもつとひどい事になってただろうし」

僕達はもう正体とか関係なくなっただけ、取り敢えず争う気は無し、僕達は武器をしまった。

「テイオさん、久し振り」

「ええ、それでヨシユアさんはどうしてクロスベルに? 確か、帝国から要注意人物と指定されていたはずですが」

「それは…はい。僕達はほぼ密入国しています。そして…テイオさんに協力して欲しいんです。ロイド達と会うために」

「ロイドさん?」

「はい、テイオさんを誘拐すればロイドたちは必ず出てきます。本当

なら銀さん経由で話たかつたんですけど、黒月にテイオさんの事を言われて」

テイオさんは話を聞くと悩んだ素振りを見せず、すぐに頷いた。

「アリサさん、きつと直ぐに戻りますから。私が誘拐された事広めておいてください！」

「えっ、テイオ主任?!」

「ほらー行きますよー!」

説得というか、逆に連れて行かれる姿には流石のレンも笑っていた。ラインフォルトの人はクルーガーさんの言葉で納得していたけど、でもさらなる爆弾がここで現れた。

「ヨシユア、乗れ!」

「レーヴェ?!」

「あら、真っ赤っ赤ね」

「レンちゃん、ヨシユアさん待ってください…結社の人形兵器?!」

まさかのタイミングでレーヴェエが現れた。しかも変身を解除した状態で。

「死線か、お前がラインフォルトに侵入して以来だがだいたい10年振りと言ったところか」

「ええ、剣帝レオンハルト。生きていたのですね。そして、この混乱はやはりあなた方が引き起こしたのですか!」

「愚問だな、クルーガー。お前もこれ以上の惨劇を起こし、その姿は血にまみれている。俺と変わらん。月光木馬團、破戒や黄金蝶と同じそこの女がお前のしてきた事を知れば…フツ」

「レーヴェー!」

「…お前は諸善裏の人間。俺と同じだ。ヨシユアやレンと同じ様に表として生きたいのなら、お前はその女を護れ。俺達から、それが出来ないのなら、今ここで散れ!」

「私は死にません。お嬢様を…守るために!」

「行くぞ!クルーガー!」

僕とレンはテイオさんとラインフォルトの女性社員さんに手を出さない様に言い。二人の立会人となることを選んだ。

「レーヴェも素直じゃ無いよね」

「ええ、死線さんとは話した事は数える程しか無いけど、結社よりも表にいる方が彼女にとっても…ね」

レーヴェは僕とレンを結社から遠ざけようとずっと思ってた。もしかしたら、レーヴェにとってもこれは償いなのかもしれない。

第11話

クルーガーの放つ糸を俺はケルンバイターで切り裂く。正面からの攻撃を無効化すると、今度は後ろ、そして直上からも俺へと糸が襲いかかる。

「腕を上げたな、クルーガー」

「ええ、お嬢様のメイドとして覚えなければいけない事が沢山ありましたので」

「シャロン！」

叫ぶ少女を尻目に迫りくる移動しをただただ切り裂く。

「貴方はより鋭さを増しましたね」

「死んでから、より世界が見えるようになってな。己の弱さをより実感した」

軽口を言いつつも俺と死線の戦いに終わりはない。奴の好きを付き俺はケルンバイターを腹に

「シャロン！」

その時、俺の身体に導力矢が刺さった。ダメージは無いが、それが連続して行われる。死線から離れるしか無かった。

「私は、貴女に護られるだけの私じゃないの！」

「…お嬢様」

「…貴方が誰とか関係ないわ！私の！私の家族を攻撃するのなら！私も戦う！」

決意の目だ。俺は名前が知りたくなった。この目を、俺は4年前リベールで見ている。

「お前、名前は」

「…私はアリサ！アリサ・ラインフォルトよ！」

アリサはそう叫ぶと剣帝に向かい導力弓を向ける。そして矢を放った。

「正面からなぞ無駄だ！」

ケルンバイターにかき消される矢しかし、その一瞬で糸が迫る。

「無駄だ」

腕で糸を掴む剣帝。通常なら触るだけで腕は切り裂かれるが、剣帝は何事も無い様に掴み、そして手繰り寄せる。

「お前が離せば逃げられるぞ?」

「シッ!」

剣帝の左腕も糸で固定する死線、それは既に力比べにも等しい物へと変化していた。

「どうした?」

「私…は」

剣帝の力に引き寄せられる死線の体。アリサはどうかして死線を助けようとするが、剣帝はそれを見越し、常に死線が射線に来るように動いている。

「見えなくてもこれなら当たるわ!メルトレイン!」

矢の雨が剣帝に降り注ぐ、即座に離れのように糸を斬ろうとするが、それを死線が邪魔をする。

「させません」

「ちい!」

矢の雨は剣帝に降り注ぎ、剣帝は撃たれる。振り解こうとするが死線は邪魔をし続ける。

「ダメージが多いな」

「降参かしら!」

「お嬢様、お逃げください!きやあ!」

死線が離されその肉体がアリサへと投げられる。アリサは死線の身体を受け止めると、改めて導力弓を構える。

「有り得ないわ」

「剣帝、その姿は」

「黒騎士、俺の新たな力だ」

姿が変わった剣帝、いや黒騎士はケルンバイターを改めて死線に向ける。

「終わりだ死線のクルーガー」

「お嬢様!」

死線はアリサを守る為に糸の結界を作るが、黒騎士の無慈悲な一撃

を防ぐ事は叶わなかった。

「受けてみよ、剣帝の一撃を！」

剣帝はスクラフト鬼炎斬を放つ。

「冥技・死縛葬送」

死線も対抗するためにスクラフトを放つが剣帝には届かなかった。投げ出される身体、斬られるメイド服。肉体からは既に血が流れている。しけし、剣帝は歩みを止めない。死線へと止めを指すためゆっくりと、そして着実に近付いていく。

「シャロンは…殺させない」

「お嬢様！おやめ下さい、ご自分の」

「シャロン、私は貴女のことを本物のお姉ちゃんだと思っているわ。何時も助けてくれて…大切な人の一人！そんな人を護りたいの！私は！」

「ほお、ならば……」

「ジブリールアロー！」

「無駄だ」

剣帝は分見を使い、二人になるとアリサに迫る。そして同時にケルンバイターを振り降ろした。アリサはそれを導力弓で防ぐが、二人の攻撃で3つに斬り落とさせる。

「私は…(ご)めんなさい、シャロン、お母様、お祖父様……ごめんね…
リイン)」

死ぬとわかっていても、その目には闘志が残っていた。武器を斬られ、何もできなくなった。しかし、その目は最後まで剣帝を見続けていた。

「…合格だ」

「…え？」「何を」

「死線、いやシャロン・クルーガー。お前にも、俺と同じ様に家族が居るんだな。敢えて言おう、お前は間違えるな。この家族を、お前を姉と慕う女を、お前は裏切れるか？もし…いや、必ず選択の日が来るだろう。お前は…かつての俺のようになるな。クルーガー、お前は結社に居るべきではない」

剣帝はそれだけを話すと仲間の元へと向かった。

「あら、速いのね」

「行こうかレーヴェ」

「ドラギオン！」

「ギヤアアア!!!」

「うくと、ロイドさん。ごめんなさい！」

仲間とその友人を乗せ、ドラギオンは大空へと羽ばたいた。迫りくる帝国軍をスクラップへと変えながら。

第12話

「不法侵入罪なのですが」

「ふっ、俺達にはその程度だな」

「あはは…テイオさん、ごめんね」

「うくん、導力ネットで何とか支援課のお兄さんに連絡が取れたわ。多分数時間したら来るんじゃないかしら？」

「そう言うとなんは俺に導力端末を見せる。メッセージ機能を使いロイド・バニングスと言う男に連絡したようだ。」

《魔都において並ぶ者なき捜査官殿へ》

私の主催するお茶会に参加しませんか？

参加者は魔都の楽園、その妖精を愛するエプスタインの申し子。そして永遠に己を喰らい続ける蛇から4人、会場はかつて私の機と両親が傷を癒やした地。是非とも参加お待ちしております

仔猫より》

「似合わないな」

「そんな事言わなくても良いじゃないの？」

「確かにね、昔からレンのお茶会は何かしら問題が起きてたからね」

3人の語らいをブルブランとルシオラは見る。二人にとって剣帝は友人と言える間柄であり、ヨシユアとレンは幼かった事もあり、自身らの弟と妹の様に接してきたからである。

「しかし、今日は災難だったな」

「確かに、我が友はかの新総督殿と相見えたそうじゃないか。ふっ、その勇姿見れないのが残念だよ」

「……もうさ潜入は僕かブルブランがやろうよ。レーヴェに任せてたら気が気じゃないよ」

「そうね…ヨシユアには未だに隠れんぼで勝てないもの」

陽動、潜入、俺も大抵の事はこなせるのだがこの頃は正面突破での戦闘が多かったせい、焼きが回っているな。

「さて、彼等が来るまでは休んでいなさい。来たら、私が教えてあげるわ。レーヴェ、わかってるわね？」

「安心しろ、支援課の者達の実力を測るだけだ」

俺は素直にまだ見ぬ強者との戦いに期待をしている。特務支援課、レンとヨシユアからの話では鉄機隊ともやり合い、かの教団の残党を倒し、至宝の力を退けた。

「俺と違い、自身の信じる物を持ち今も戦い続けている。俺の様に人間に絶望してもおかしくないこの状況でもだ」

「レーヴェ、貴方は」

「俺は…どうしたいんだろうな」

一人、部屋を離れ空き部屋へと向かう。気配は無い、今は今だけは「ゴフツ…ゴハツ…」

辺り一面を自分の吐いた血が染める。肉体、苦しき、わかりきっている。彼奴等の前では何とか平常を保ってはいるが…俺の中で何かが叫んでいる。殺せ、破壊しろと、恐らくそれが俺を黄泉がえらせた何かなのだろう。そして…

「悪魔か」

影の国では奴等が何度も現れた。その一体が自分を器に具現化しようとしているのではないか？という不安を拭う。悪魔程度に俺は負けはしない。

「…くっ、ふう。問題ないな。それよりも」

俺は屋敷の外に気配を感じた。人数は4人だ。普通誰かなどわからないハズだが、俺には確信があった。ヨシユア、レンの話聞きそう思うまでに彼等の存在は俺に取って大きい物だ。

「来たか、特務支援課」

ロイドside

「アリオスさん、リーシャ、キアも、こんな事に突き合わせてすまな

い」

「ロイド、気にするな。仲間が攫われて動かない人間じゃないのは知っているさ」

「そうです、ロイドさんは私達のリーダーでもあります」

「キーアもだよ、大丈夫。ロイドだけじゃない、アリオスさんもリーシャも居るから！」

キーアだけじゃない、皆が笑顔を向けている。そうだ、俺には仲間がいる。今は居ないけどエリー、ランディ、ノエル、ツアイト。必ずテイオを助けて見せる。

「あら、支援課の皆さんいらっしやい。お兄さんも久し振りね」

「ああ、2年前以来だね」

「久し振りロイドさん」

「ヨシユア?!」

まさかエステルとパートナーを組んでいるヨシユアが敵に居るなんて…まさか結社に

「あつ、ロイドさんこんばんわ〜！見てください、レンちゃんからリベール限定みっしいを受け取ったんです!!!」

「え?」

誘拐されたと思ったテイオだけど、みっしいのぬいぐるみを抱きながら俺の所に走ってくる。おかしくて、懐かしくてつい笑いがこみ上げてきた。

「キーアちゃんもどうぞー！」

「わー！テイオありがとうー！」

微笑ましくて、ずっと見ていられると思った時、二人が武器を構えた。俺はキーアとテイオを守るようにトンファーを構える。

「ふっ、贈り物は喜んで貰えたようだな」

「お前は…!!!」

アリオスさんが驚愕した顔をしている。感じる、俺が到底敵わないレベルの実力者だ。

「風の剣聖か、教団壊滅以来だな。そして…そあかバニングス…あの刑事の弟か！」

「！兄貴を知ってるのか！」

「ロイド、下がれ。こいつは結社の執行者N.O. 2 剣帝レオンハルトだ！」

「！執行者?!」

「…ロイドさん」

俺は一旦トンファーをしまい、右手を出した。

「ガイ・バニングスの弟。ロイド・バニングスです。色々と言いたい事はありますが…初めまして」

「執行者N.O. 2 剣帝レオンハルトだ。お前達への連絡手段がわからなかったのな。ティオ・プラトーを誘拐させて貰ったしだ。すまなかった」

「いえ、ティオも楽しそうでしたし」

するとレオンハルトさんは目を閉じて俺に剣を構えた。

「ロイド・バニングス。俺と立ち会ってもらおう。そちらは支援課として俺と戦って欲しい。魔都の護り手の実力、俺に見せて欲しい」

純粋な瞳で俺達を見る。皆、用意は終わっていた。

「特務支援課として、剣帝レオンハルト。誘拐の現行犯で逮捕します。

…これで準備はできましたよ」

「そうか…ならば！」

激しい一撃が俺のトンファーを伝って身体にくる。でも、受け切れない物じゃない！

「セイー！」

「ハア！」

「アリオス・マクレインか！」

俺が剣を弾くとそこにアリオスさんが一撃を与える。そして次はリーシャだ。

「逃しません」

「銀か！」

リーシャの振るう大剣をあの手で受けて、アリオスさんへと飛ぶ。

「アリオスさん！」

「ああロイド！」

戦術リンクを利用してアリオスさんの代わりに受ける。

「何！」

「連携なら…負けはしない！」

「この中で俺が一番防衛できる。なら、受けるのは俺の仕事だ！」

「行けます！クリスタルエッジ！」

「無駄だ！」

「なあ！アーツを斬った！」

ティオの放ったアーツが斬られる。これには驚きが隠せない。レンちゃんとヨシユアも驚いていたし…

「鳳凰裂波！」

「無駄だ！」

アリオスさんのスクラフトが防がれる。それ程の実力者と今俺達は戦っているのか！

「リーシャ！」

「ロイドさん！」

「真！比翼双竜撃！！」

「ぐはっ」

レオンハルトさんが下がり、今度俺はティオと戦術リンクを繋げる。

「ティオ！」

「ロイドさん！」

「ΩストライクⅢ！！」

遂にレオンハルトさんが膝を付いた。ソレを結社の人達が驚く様に見ている。あれ？占い師の人に、怪盗Bまで?!

「流石だな。この所、膝を付く事がなかったのだが…」

「改めて、俺は特務支援課のロイド・バニングスです。お話を聞かせて欲しいのですが」

「良いだろう、特務支援課。お前達に支援を要請したい」

第13話

俺はレオンハルトさんの話を聞くため、ローゼンベルク工房の一室に通された。

「まず、俺は執行者N.O. 2 剣帝レオンハルトだ」

「特務支援課のリーダーを努めています、ロイド・バニングスです。俺達に支援を要請したいとの話ですが、いったい」

レオンハルトさんは俺を見ると重い空気になりながらも話し始めた。

「まずお前達も結社身喰らう蛇は知っているな」

「はい、アイアンリードさんと鉄機隊とは一度手合わせをした事があります」

「奴等が動いている。時期は…まだ解らない、ただ今月中に動き始めると俺は見ている。俺達だけではクロスベルで動くのは難しい地の利があり、なおかつ実績もあるお前達に支援を要請した次第だ。頼む、奴等の計画を潰す為に協力してくれ」

レオンハルトさんは俺達に頭を深く下げた、アリオスさんは激しい目を向けているが、ソレをキアアがやめさせた。

「アリオス…キアアね、この目判るよ。信じられる、私達と同じだよ…信じて」

「…キアア、君はこの男が何をしたか知らない。ティオ・プラトー、君は覚えているだろう。ガイに救われた時を、コイツは教団の科学者を目の前で殺した。この男に慈悲は無い」

「…ああ、俺の本質は変わらないだろう。修羅として戦い続ける。だが…いやもしお前が俺を信じられない時、俺を斬れ」

レオンハルトさんから只ならない程の気を感じた。自分を斬れ、簡単に言えるだろう。でも、ソレを本気の目でアリオスさんに向けて言っただ。覚悟もすべてが……

「わかりました。俺は…協力します、でも貴方達のように殺人はできません」

「構わない、お前達は俺達（身喰らう蛇）とは違う、お前達のやり方で

手伝ってくればいい。俺達も、お前達のやり方でやる」

俺とレオンハルトさんの瞳が重なった、わかる。レオンハルトさんの悲しみが、決意が、俺も負ける訳には行かないんだ。

「わかりました。俺達は俺達の方法でやります」

「さらばだ」

帰りは怪盗紳士の魔法で送られた。

「…ロイド」

「ロイドさん」

「ロイドさん」

「ロイド！」

「…テイオ、ごめん。迷惑かける事になるけど」

「大丈夫です、私も特務支援課の仲間ですから」

皆大丈夫だと言ってくれた。俺はアークスⅡを開いてある人物にメッセージを送った。

《ごめん、迷惑かける事になる。でも、信じてくれ》s. s. s.

メッセージはバレない様にテイオにサーバーを何個か経由して貰った。誰から送られたかも解らないだろうけど、これなら伝わる筈だ。

「みんな！行くぞ！」

「オオ!!!」

ロイド達を返し、俺達は情報収集に勤しんだ。そして5月20日、俺達の道はまた重なった。

「へえ、新しいビルも多いし帝国の都市とは随分違うな」

「あのオルキスタワーが特に印象的ではありませんね」

「元々、帝国と共和国に共同統治されていた自治州なだけにどちらの影響も受けているし」

ツールズ第2分校の面々が歩いていった。剣帝は変装しているが、関わらない為に離れた。

俺はクルト、ユウナ、アルティナと共にオルキスタワーに向かった。でもおかしい、入ってから解ったんだが内戦でもあったかの様に所々戦闘の跡が見える。ユウナは気丈に振る舞っていたが、無理してるのはわかる。

「教官、ユウナさんは……」

「アルティナ、大丈夫だ。…大丈夫」

今は見守るしかない、見守るしかできないんだ。

今は目的地である総督執務室に向かった。簡単なチェックを受けて通される。ノックを3回行い入る。

「総督閣下、失礼します」

「ああ、入りたまえ」

「あ……」

「……お久しぶりです」

「失礼します」

「ああ、二人共久しぶりだ」

そこには物々しい雰囲気の中で書類仕事を行うルーファス総督がいた。書類をどかし立ち上がる。

「それ以外は初めてだったかな？クロスベル州総督ルーファス・アルバレアという。見知り置き願おうか、トールズ第Ⅱ、新Ⅶ組の諸君」

ルーファスさんに近付き改めて話しかける。書類仕事をしながら雑談が始まった。

「フフツ、久々の邂逅にはなるが…隔世の感があるかもしれないな。背も伸びたようだが、随分見違えたものだ」

「……恐縮です。自分以上にユーシスの方も随分と見違えたようですが」

「ああ、そうらしいな」

弟の事でありながら、簡単に述べる。でも若干だが喜んでる様子も見える。

「ーそして、そなたもまた雰囲気が変わったものだ」

皆がアルティナを見つめる。内戦の時を知っている俺としては確かにとしか言いようがない。でも、背は伸びたのか？

「総督閣下はお変わりなく。まあ、身長はそれ程伸びてはいませんが」
何故かアルティナから薄目で睨まれてしまった。それがバレたのかユウナから脇腹を小突かれる。

「フフ、事務的な所も変わっていなさそうだが良き仲間にも恵まれたよ
うだ」

「初めまして閣下、ヴァンダール家が次子、クルト・ヴァンダールと申
します」

「フフ、ソナタの御父上には以前お世話になった事がある。本校に入
らなかったのは惜しいが、これもまた巡り合せだろう。そして、そち
らの君は……」

ユウナは静かな怒りを抱きながらもルーファスさんを見ていた。

「ユウナ・クロフォードです。クロスベル軍警学校出身で改めて
トールズ第Ⅱに入学しました」

話すユウナをクルトも見つめる。

「フフ、君のことも聞いている。オランダ中尉やシーカー少尉の後
輩に当たるのだったかな？」

「っ……」

「そして、リーヴェルト少佐の推薦を受けて第Ⅱに入ったと聞いた。
色々あるだろうが、これもまた善きめぐり合わせだろう。帝国とクロ
スベル、二つの視点を融和する意味でもね」

そこから帝国本土からくる視察団の話聞き、特務活動の報告を受
ける。

「…本当ですか」

「あくまで現在は調査だ」

幻獣の調査の下に俺とアルティナにしか解らない暗号文が掲載さ
れていた。

《剣帝レオンハルトの調査》

「詳しくは用紙に書いてある。……さて、ユウナ君とクルト君には一
度退出して貰おう」

「…なん」

「わかりました…行くぞユウナ」

クルトに静止されたユウナ、二人は警備をつけられながら部屋を退出する。

「さて、本題の件だ。現在、剣帝レオンハルトと思われる人物がクロスベルを強襲した。クロスベル方面師団の1割が個人に敗れた。コレは如何ともし難い事態だ。君達には悪いが、調査して貰いたい。勿論、片手間で構わない。レクター少佐とクレア少佐も行っているからね。だが、広める事はしないで頂こう……クロスベルでの特務活動、頑張りたまへ」

ユウナ達と合流して特務活動に入る。でも…

「教官、どうしたんですか？」

「…ユウナ、いや何でもないんだ」

剣帝レオンハルト、本当にクロスベルに居るのか。居たとして一体…何を。

とある不良神父はミシユラムワンダーランドを相棒と共に歩いていた。

「んで、なんやリース。あの巫山戯た報告は」

「しやうがないじゃない、直ぐに連絡したんだもの」

「阿呆、何考えてんねん。お前休暇でクロスベル入りしただけやろう、此方は大問題や。新人に死人の復活、最悪外法狩りが動く。クロスベルでまた紛争が起ころぞ」

「でも、止めてくれたんでしょ？千の護り手さん」

「…団長にてこ言われたわ。今回動けるのはオレとリースだけや。やるしかない」

ネギのように緑色でツンツン尖った頭の神父は愛用のクロスボウを持った。

「…やってやるわ」

「はふはんはー！」

「はあ、何くってんねん」

変わらない相棒、笑いながらクロスベルへと向かった。

第14話

「…やはり幻獣か」

「おかしいわね、あの時よりも霊脈が活性化してるのかしら？」

剣帝達はクロスベル州を探索していた。その時、ケルンバイターから異変を感じ当たりを探っていると幻獣に出くわしたのだ。

「でも、その幻獣を仕留めるレーヴェの方がおかしいわね」

一太刀で幻獣の息の根を止める剣帝にレンは疲れた顔を見せるが…すぐにその表情は墮れる。

「レン、どうした」

レンはレーヴェの左腕にしがみつく。

ソレは兄を思う妹のようであり、目元には涙が滲んでいた。

「レーヴェ、もう何処にも行かないわよね」

「…何故だ」

「…レンね、また昔見たいな夢を見るの。もう、忘れていたい記憶、レーヴェが死んじやった時、ねえ、レーヴェ。終わったら、エステルとヨシユアと一緒に…」

剣帝は仔猫の頭をそっと撫でた。

初めて出会った時と同じ様に、優しく、大きい手で。

「…すまない」

答えは残酷だった、剣帝自身、己の命をわかっていない。誰かの策謀であるとは考えられるが、ソレが思っている人物である場合、レン、ヨシユアには辛い記憶となるだろう。

「だが…未来を変えられるなら俺は全てを断ち切り、お前達の下へ帰ろう」

ソレは剣帝の紛れもない本心だった。修羅に落ち、再び剣士として蘇った男の一寸の曇もない言葉、仔猫は何も言えなかった。

「…今はそれで良いわ。でも、忘れないで。レンの今のお姉さんはとでもしつこいわよ」

「…フツ、エステル・ブライトか。その時はヨシユアに助けて貰おう」

軽口を言い合いながら浜辺を歩いている。

「……こつちの調査は終わりよ、でもレーヴエ。ジオフロントの方でおかしな反応が出てるの」

「……戻りか」

「エスコート頼むわよ、ナイト様」

「まったく」

剣帝はクロスベルへ向けて歩く、その前で仔猫は優しい笑みを向けながら歩いていった。

とある男がトールズ第2分校の演習地へと訪れていた。隣には東方の装束を身に纏う隠者『銀』、二人は全ての警戒を掻い潜り太陽の光が満点に広がる中を、たった一人に会うために現れた。

「ちっ……ロイドの野郎、俺に話をしないで勝手に……」

「……悪かったよ、ランディ」

「まったく、毎回毎回無茶しやがって。赤い星座の時もお前は……」

「有れはランディがいきなり居なくなるからだろ！俺は悪くない」

「……くそ……あ？」

赤髪の男、ランディ・オルランドは振り向く。そこには戦友、同僚、親友、それ以上の相棒が笑って立っていた。

「……バカ野郎、ここまできやがって」

「……ランディ、ありがとう。テイオの事、俺達の変わりに気に掛けてくれて」

「……つたり前だ！テイオ助は俺達の仲間だぞ！ユウ坊もお前に会いたがって……」

「……ロイドさん、」

「ランディ、ごめん。また連絡するから！」

ランディは呆れながら森へと消えていく二人を見る。その目は帝国に来てからあまり見せたことの無い、真に目的を持った男の目だった。

「協力してやるよ、ロイド。特務支援課の一員としてな！」

ロイドは走っていた、長い年月の逃避行は彼の脚力、スタミナ、そ

して熱い心を成長させた。

「支援課のお兄さんにも伝えるわ、ジオフロントで異常な反応を検知したの。レン達はちよつと遠くて…頼めないかしら」

「わかった、クロスベルは俺達の居場所だ。任せてくれ！」

俺はリーシャと一緒にクロスベルに潜入した。市民の人達は協力的だけど、俺達は指名手配犯だ。彼等に迷惑はかけられない。

「ロイドさん、テイオリオさんとエリーさんは」

「駄目だ、ランデイにも接触したし…テイオはこの前の一件もある。エリーは…今ミシユラムだよ」

「でしたね…でも、皆さん変わらずで良かったです。テイオさんにもももも会えてキーアちゃんも楽しそうでした」

「…いつか、皆でまた笑えるさ。支援課の…あのビルで」

そのために、俺達はクロスベルの独立を勝ち取らなくちゃいけない。

「ロイドさん、ここです」

「わかった」

リーシャとこうして動くのはあの時（閃2）依頼だな。俺は変わらずダクトを通って進むんだけど…

「ロイドさん、大丈夫ですか？」

「あつ、ああ」

やっぱり、『銀』の衣装でここを進むって言うのはちよつと止めたほうが良いかもしれないって…俺が先に行けばよかったのに！ダクトから出て、一旦落ち着こう。

「ロイドさん？」

「え？あつ…いや、何でもない！何でも！」

ランデイかワジが居たら詭われたかもしれない。

「行こうか！」

「はいー！」

俺とリーシャは途中に居る魔獣を倒しながら進んでいく。でもおかしい、俺達以外に誰かが侵入したような跡がある。

「ロイドさん、アレを！」

「な!! ティオ!!」

リーシャに言われた方向を見るとティオと確か情報のⅦ組の生徒が鎧を纏う人型魔獣に襲われるところだった。それをラインフォルトのクロスベル支社長とメイドさんが助けてくれる。

「まだだ！」

刀を持った青年が声を上げた。俺は覚えてる、2年前にクロスベルで戦った少年だ。あの時は少年だったけど、今はまさに青年と呼ぶに相応しい。

「ライジング・サアアアアン!!!」

「我が舞は夢幻…去り逝く者への手向け…眠れ…銀の光に抱かれ…!

縛…滅!

俺とリーシャのスクラフトを同時に受けた魔獣は悲鳴と共に倒れる。俺とリーシャはすぐに領きあう、正直やってしまった感は否めないけど、ティオや俺たちの後輩や子供に何か有るよりマシだ。

「やります！」

発煙弾を焚いてすぐに出口に走る。

「連絡が早すぎる！」

「ロイドさん！」

「ローイドロー!!!」

「キアア?!」

「ギアアアアオウ！」

「ロイド! 乗って！」

「待って、キアアこれって！」

「キアの新しいお友達! リーシャも！」

「結社の人形兵器? いえ…でも……」

キアの御子の能力はわかっているよ。でも、人形兵器も友達になるんだなって、改めて驚いた。

ヨシユアSide

「…レーヴェを迎えに来ただけなのに」

「おつ？ヨシユア君やないか？なんや、エステルちゃんとは喧嘩か？」
「ハハハッ：ちよつと帰れない用事が出来ちやつて。ケビンさんも、リースさんも、お久し振りですな」

僕は二刀ダガーを何時でも抜ける体制に居る、ケビンさんもリースさんも同じだ。僕は戦いたくないけど、レーヴェの為に戦う事になるかもしれない。

「……ヨシユア君、教えてや。死人が黄泉帰る、そんなん有ると思うか？」

「ありえないでしょう、でも、現実にある」

「ソレが、神の定めた理から外れた方法でもか？」

「…貴方をレーヴェのもとには行かせない！」

「…俺等も戦いたくなかった。行くで、守護騎士が第5位千の護手ケビン・グラハム」

「同じく、従騎士リース・アルジエント」

二人が名乗りを上げる、なら僕も名乗ろう。過去を、今の僕は過去の僕としてここにいる。

「身喰らう蛇が執行者N.O. XIII漆黒の牙ヨシユア」

「…わかつとつたけど、俺等の名乗り、長いなあ」

「そう…ですな！」

油断させながらケビンさんは僕にクロスボウを撃つてくる。改造されているのだらう、弾いた左腕にジンジンと重みを感じる。

「流石や、ヨシユア君。でもな」

「カオスブランド！」

「ぐっ…」

「そしてやー！」

リースさんのアーツに反応できず、そのままケビンさんから放たれるクロスボウに当たる。衝撃だけだから殺すつもりはないんだらう。「双連撃」

僕のクラフトは簡単に二人に避けられる。でも、それはわかりきっている。

「だから」「奥の手だ」

「マジかいな?!」「嘘?!」

そういえば、分身を見せた事は少なかったと思う。残った僕が、二人に対して同時に臍を行う。

「くっ!」「きゃあ?!」

峰打ちだけど、僕の全力を込めた一撃だった筈なのに、二人は普通に起き上がってくる。

「…ケビンさん、これ以上は本気でやらなくちゃ行けなくなります」

「せやな、ヨシユア君。でもな、此方も引けないんや」

「?!ケビン、そこまでしなくても!!」

ケビンさんは背中に聖痕を出す、本気なんだろう。でも、それは僕も同じだ。思い出せ、あの頃を。思い出せ、血に塗れた日々を。

「ゴメン、エステル」

「我が深淵にて煌めく蒼の刻印よ、天に昇りて煉獄を照らす光の柱と化せ……。走れ、空の聖槍!!」

「僕は…終われない、せつかくレーヴェに会えたのに、目の前にある未来を…失いたくない!」

僕とケビンさんのSクラフトがぶつかる。最終的に地面に立っていたのは

ケビンさんだった。

「流石や、ヨシユア君。聖痕を使わせたんやから」

「…ケビンさん、リースさんも、すみませんでした」

僕は謝罪だけ告げる、そして…意識は深い闇に飲まれた。

「フッフ、ヨシユアとレーヴェだけでない、外法殺しもか……コレは、ますます面白くなる」

第15話

「リース、感じるか？」

「ええ…凄い気を感じる。そして…この威圧感」

「ちよつと！レーヴェ、どうしたの？もう疲れたのかしら？」

「レン、そんな訳は無いだろう」

魔獣の蔓延るその中に二人は立っていた。

大鎌を振る少女と見覚えのあるコートを纏う男。

「ケビン・グラハムか、思いの外早い到着だったな」

「あら、あのときのネギ神父さん。影の国以来かしら？」

「ああ…まあ、言いたいことはありますがあ。先に魔獣を倒さんとな
！リース！」

「はい、そうだ！この先の病院のレストランで」

「リース」

軽口を言いながらも、殲滅する四人。だが、そこに魔獣を倒した安堵の気持ちはない。

「…ヨシユアをどうした」

「…倒した」

剣帝はその言葉を聞くなり、ケビンに向けてケルンバイターを振り降ろした。ケビンはそれをボウガンで受けると、笑う。

「いやあ…意外や。あんたもキレる事があるんやなって」

「…ヨシユアは大事な弟だ」

「…この世にはな、自然の摂理がある。死人が蘇るのは、あつてはならんのだ。特に、アイツと関わってたアンタはなあ！」

「白面のことか！」

「そうや！アイツの研究に命の研究もあつた！お前は、それをうけたんじやないか！」

剣帝は否定したかった。だが、それを否定する材料は見つからない。それどころか、黒騎士の力さえ、あの男が与えたのではと思えるほどに

「ふむ、思いの外早く姿を表す羽目になるとは」

「…キサマアアア!!」

そこにはヨシユアを抱えて不敵に笑いながら空中に浮かぶ、憎き白面がいた。

「ふむ、ヨシユアの聖痕はもうないか。欠片でもあればよかったのだが」

「やっぱり、生きてたか」

「久し振りだ、影の国以来かな? ケビン・グラハム。外法殺し」

「違う、ケビンは」

「リース、無駄や。可能性として、予想していたが、嫌なもんや。一度殺した相手が邪魔をしに来るのは」

「クククツ…私は研究者でね、かつての研究対象はもうどうでもいいのだよ。私は! ついに魔人への至った、真の不老不死へと至った! レーヴェ、君のお陰だ。君の戦いを、闘争心を、意思を! 全てを利用して貰った。そして、どうだ! 私は女神に最も近い魔人となった! だから、餞別だ」

「あつ…ああああああ!!」

「ヨシユア!」「ヨシユア君!」

「ヨシユアさん!」

「…リベルアークの時は破られたが、今度はそうは行かないぞ。今度こそ、ヨシユアはお前たちを殺すか、死ぬまで止まらない」

「ワイスマン!!」

剣帝は怒りに任せてその刃を振るうが、それをヨシユアが防ぐ。ワイスマンのアーツに吹き飛ばされた瞬間、

「…ああああ嫌な顔じゃないの」

「せっかく仲の良い人達に会えたのに、よりもよって貴方に逢うなんて」

「大丈夫か友よ」

「ぐっ…すまない、ブルブラン。それに…: ヴイータか?」

「黄泉帰ったのは本当だったのね。でも、今は彼奴よ」

「ワイスマン、今度こそ送ったるわ」

「必ず、倒す」

各々が気持を言葉にするが、ワイスマンは不敵に笑うのみだ。

「まあいい、ヨシユア。皆殺しに」

「させないわ」

「ケルンバイター、世の理を砕け！」

剣帝の持つケルンバイターが蒼く輝き、飛翔する斬撃が白面を襲う。だが、白面はそれを腕を払うだけで消滅させる。

「やるぞ、ヴィーター！」

「…いきなりね、さあ…グリアノス！」

かつて殺された愛鳥の幻影が現れ、剣帝に重なる。数多の鳥達が刃となつて剣帝に振るわれる。

「幻鳥斬」

鳥の羽ばたきが刃となり、無限に思える時間白面を斬り付ける。そして、最後に巨大なグリアノスの幻影が現れ、白面を吹き飛ばした。

「まだ、終わらんぞ。ヨシユア、痛みは一瞬だ」

「ヨシユア君を斬る気かいな!!」

「峰打ちだ」

ケルンバイターの鞘を使いヨシユアを斬り続ける。足と腕の骨を砕いた。これぐらいなら後で簡単に治療できる。

「容赦ないな、ヨシユアの骨を砕いたか」

「貴様の事だ、意識を奪つても人形として利用しただろう」

相手の性格を知っているからこそ、容赦をしない。いくら自身の方が強くとも、いや違う、成長したヨシユアの実力は未知数であり、勝てるとしても、苦戦は免れないからだ。

「だが…こんな事もできる」

「うっ…うわあああああ」

ヨシユアの悲鳴と共に、その姿は禍々しく、人間の姿の欠片もない化け物へと変貌する。

「ヨシユアを依り代にさせてもらった。…さて、私としては速く行かなくてはならないのでね。今はこれだけさ」

「ワイスマン！」

ブルブランが怒りを滲ませた声を上げる。彼は紳士である、その紳

士が、仲間を無惨に扱われる事を許せるはずがなかった。

「影縫いか：ブルブラン、だがね。私の影は特別製なのさ」

影縫いにて動けないはずのワイスマンが消える。

「さらばだ諸君、ヨシユアと楽しんでくれたまえ」

声だけが残り、瘴気が立ち込める。

「やるしかない、リース」

「ちよつと?!聖痕出すって本気なの?!」

「ヨシユア君、我慢してや!クロスギアレイジ!!」

「ギャアアア」

ボウガンに仕込んだ刃で連続で切りつける。しかし、何処からとも無く生えてきた触手に吹き飛ばされる。

「ケビン?!」

「こりやあ……かなり不味いわ」

そして、ケビンと交代するように彼等が立った。

「昔はかわいい子供だったのに：まったたく、白面は許せないわね」

「ヨシユア、少し我慢してね。レンのお兄さん何だから」

「ふつ：ヨシユア、君のその姿を我がライバルに見せるとなんとかなうかな」

「エステルのためにも、起こさないとかしら?」

「：ヨシユア」

結社に連なる者達だ。各々が決意を込めた言葉を繋ぐ。そして、それぞれが攻撃を始めた。

「はあー!」

天属性のアーツを放つブルブランそれに続くようにルシオラ、ヴィータも同じように天属性アーツを放つが、ヨシユアはただ吠えるだけだ。

「レーヴェ、行くわよ」

「ふつ：お茶会か?」

「ええ、大事なお兄ちゃんを取り戻すためだもの」

「行くぞ、レン!」

「ええ!ブラッドサークル!」

「破碎剣！」

大鎌による斬撃と、ケルンバイターによる一閃。ヨシユアの胴体に裂け目ができ、そこから大量の黒煙が現れる。

「レー……ヴェ」

「ヨシユア！」

藻掻き苦しむヨシユアが手を伸ばした。レーヴェはその手を取ろうとするが、

「…僕…を……殺……て」

「……ヨシユア」

再び飲み込まれようとするヨシユア、剣帝は再び魔剣ケルンバイターを構える。

「レーヴェ！何を！ヨシユアを！ヨシユアを殺す気なの！」

全員が剣帝を止めようと動く、だがそれを制したのはケビンだった、

「…送ってやってくれ」

「……神父、笑わせるな。俺は、ヨシユアを守る。カリンとの、約束だからな」

「何を」

黒騎士へと変わる剣帝だが、その姿は段々と白く変わる。禍々しい姿から気高く、聖騎士を思わせる姿に。誰ものが、その変化に息を呑む。

「理の外にあると言うのなら……もう一度……もう一度、俺に力を……ケルンバイター!!!」

白銀に刃が輝き、刀身が伸びる。魔剣いや聖剣と言うに相応しい姿に変化したケルンバイター。

「俺の仲間を……弟を……取り戻すため、力を貸せ……ケルンバイター!! はああああ……斬！」

鞘から抜かれた聖剣はヨシユアの肉体を斬り裂いた。否、ヨシユアに取り憑いた悪魔を……消し飛ばした。ケビンでさえ、そのような力を見たことも聞いたこともない。だが、目の前で、悪魔にいや、悪魔と

して変化させられた存在が戻ったのだ。

「…レーヴェ」

「眠れ、今は安め」

ヨシユアを寝かせる剣帝、そしてその姿に変化が起こる。白騎士の姿から元の姿に戻るなり、剣帝の右腕が若干だが薄れていた。

「…この力は、俺そのものを消し去るか」

「レーヴェ」

「友よ、いや私は何も言うまい」

「せめて、生きてあげなさい。弟と妹のためにもね」

「…」

ヴィータは剣帝を直視することが出来なかった。今すぐ消える訳ではないが、それでもかかって恋した男の死を再び知るのは応えるのだ。

「…なあ、レーヴェ。あんたはワイスマンの術で黄泉帰った。だから、言わせてもらうで。そのまま叛骨し、その力を使えばアンタは消える。それこそ、魂も。女神の下に逝くこともできず、消えてしまう。その力は、それ程の物や」

「…ケビン神父、俺は既に一度死んだ。影の国で黄泉返り、今再び生きている。既に、女神には見放されているハズだ」

剣帝はそれ以上、何も言わなかった。

第16話

白面との望まぬ邂逅、そして、ヨシユアが悪魔に呑まれると言う悪夢、それは仔猫と剣帝を留まらせるには難しいものであった。

「…ヨシユア君はまだ目を醒まさないか」

メルカバと呼ばれる七耀教会の有する飛行艇の中に寝かされた包帯だらけのヨシユアを悲しみの目で見る剣帝。

「ああ、骨も折れている。起きたとしても、動けはしない」

「レーヴェも大概ヨシユアが大好きね」

仔猫もそう言いながらも、剣帝と共にずっとヨシユアについていた。

「…しかし、改めて見ると似合うものね。貴女も、レオンハルトさんも」

「…従騎士のお姉さんとは影の国以来だったかしら。こうして話すのも…懐かしいわね」

「あの頃は良い関係を築き始めたところだもの。しようがないわ」

気を紛らわせる様にリースは話題を変えるが、仔猫の目線は常にヨシユアを視界に入れている。

「…友よ、不味いことになった。結社が件のビルを襲撃するようだ。

…私はそこに乗り込もうと思う。我がライバルが死ぬとは思えないが、誰が来るかは予想出来ないのですね」

「…俺も行こう。結社の計画を潰す、それが今の俺の目的だ」

剣帝はヨシユアを一瞥した後、怪盗紳士と共にメルカバを出る。

「…ヨシユアを頼む」

残るメンバーにそう伝え、怪盗紳士の魔法陣にて消える。表情は見えなかったが、言葉に辛さが有ったことを誰もが感じ取れた。

時はすぎ、オルキスタワー内で新VII組のメンバーは放蕩皇子との邂逅を果たしていた。

「ふむ、しかし…こうして報告を聞いて見ると、感慨深いね」

「はい、レーヴエさんも変わらず元気でした！」

「あの…どういうことですか？」

リインが話についていけず、ふとオリヴァルトに質問をする。それに、彼はにこやかな笑顔を向けて返した。

「ティータ君と僕は剣帝レオンハルトと何度も戦っているのさ。リベルアークでは彼にアルセイユの翼を斬られるし、墜落するしで散々だったね」

「…話には聞いていましたが、御本人から聞くとなるとは」

アルティナが笑えないと言う顔をしながらも、楽しそうに話すオリヴァルトを見る。話しているティータも時折辛そうな顔を見せるが、笑顔は変わらない。

「あの…剣帝は、レオンハルトさんはこの惨劇を」

「…彼なら殺るだろう。クレア少佐とも話したそうだね。彼女の傷は何も抵抗するまもなく、彼につけられたと言う話した」

オリヴァルトは神妙な顔で、じっとリインを見つめた。

「…彼の本気は私とティータ君の方がよく知っている。彼の事だ、敵対しても殺されはしないさ。ただ、激しく痛むけどね」

そう言つてのけるオリヴァルトにリインは苦笑するしかなかった。

「教官、どうしました」

「いや、何でもないよ」

俺は改めて、レオンハルトさんの強さを実感した。一人の剣士としてだけじゃなく、一人の人間としての強さを。

「…リイン教官、剣帝は」

「ああ…俺達に課せられた特務。その裏には剣帝レオンハルトの調査も含まれていたんだ。でも、結局は見つけられなかった、それに別件まで出てしまったからな」

「…特務支援課」

「結局は帝国がロイド先輩達を恐れてるだけじゃないですか、ロイド

先輩は今でも市民に寄り添っているだけなのに」

ユウナの気持ちもわかる、俺自身あの人達を憎んですらいない。それどころか、羨ましい。

「リイン教官?」

「大丈夫だ、アルティナ」

俺は生徒達を連れて、分校の待機部屋へと向かった。

また時は過ぎる。リイン達トールズ第二が食事を楽しんでいる中、オルキスタワーの遥か上空に4人の人影があった。

「…はあ、オルキスタワーに潜入ってあのときみたいだな。今回は空だけだ」

「そうですね、ロイドさん。行けますね?」

「飛び降りる準備はできてる、レーヴェ、私達は何時でも問題ない」
「ギアアアス」

「時間はもうすぐだ、執行者の誰が来るかは不明だが…：覚悟はしておけ」

俺はケルンバイターの柄に触れながら、息を呑む。嫌な予感をひしひしと感じる、俺よりも強く恐ろしい気配を。

「レオンハルトさん、殺人は」

「…極力しない、すまない。殺さないとは約束出来ない」

「いえ、構いません。俺は捜査官、貴方は執行者。それぞれの立場がありますから」

「…ロイドさん」

バニングスは人殺しを許すことは出来ないだろう。少ないが手を合わせ、話すことでそれを理解できた。こいつは兄ガイ・バニングスと同じ熱く優しい男なのだろう。

「さて、レーヴェ。私は一足先に降りよう」

「いや…：…丁度だ」

ブルブランが降下しようとした瞬間、結社の魔法陣の光と共に俺が

最も会いたくない男達が出てきた。

「よお…空でお楽しみか？レーヴェ」

「マクバーン!!!」

聞こえないはずの声、それが俺にはしっかりと聞こえた。

「はああああ!!!」

「ククツ！クハハハハ!!楽しいぜ！レーヴェー！」

俺のケルンバイターと奴のアングボールがぶつかる。そして、そこを中心に巨大な余波がオルキスタワーを襲った。

「レオンハルトさん！」

「ロイドさん！」

「あれ？特務支援課に銀じゃないか、それに……ちよつと予想外だね、ブルブラン？」

「ふつ…我が美のライバルに友人が居るのなら、私は此方につくだけさ」

「行くぞー！リーシャ!!怪盗紳士！」

「ふつ…行こうか、バニングス捜査官、銀殿」

ここに、二度目の劫炎と剣帝。そして、道化師と特務支援課と怪盗紳士の戦いが始まった。本来では起こるはずのない戦いが、盤を崩したのである。

「くっ…攻めきれんか！だがっ…」

「流石だぜ、レーヴェー！あん時よりも強くなりやがったな！」

アングボールをケルンバイターで受け止め、弾き返す。それと同時に水属性アーツによる攻撃を周囲にばら撒き、あたりの温度を下げる。

マクバーンの炎はこの程度で消えるはずが無いが、引火はある程度マシンになるはずだ。

「オラァー！ハハツ…楽しいな!!レーヴェー!!!」

「ちい……一段階上げるしかないかっ……はアアア」

黒騎士へと変わる事でマクバーンとの力関係が一気に変わった。下だったのが同等へとなれたのだ。

「はっ！良いじゃねえか、混ざってるぜお前もなあ」

「ワイスマンに与えられた力というのが腹だたいいが、今は貴様を倒すことに専念させてもらおうぞ!!」

「はん？あの野郎も生きてんのか……あとできっちり殺さねえとな。安心しろ、俺達が必ず殺す」

「奴を殺すのは俺だ！」

「ハッ……なら、生き延びてみる!!」

「全員、防御しろ！」

「見せてやるよ!!ジリオンハザードオオオ！」

すべてを巻き込むその一撃、皆は防御が間に合っただけではいかなかった。だからだろう、俺は再びその力を使った。

「聖剣よ、総てを守りし楯となれ」

俺の肉体が変わる、白騎士。総ての守護者へと。

「アルテマスガード」

その名を叫び、聖剣となったケルンバイターから張られるシールドが皆を包む。俺の肉体から大量の力が吸われていくが、それでも俺は護りきった。

「レーヴェ、てめえ……」

「……負けん、剣帝である限り、俺が、俺である限り」

「いけすかねえ……てめえはそんなんなのかよ！」

「そうだ……俺はもう、嘘はつかん！俺はヨシユアを、レンを守る！たとえそれを自己満足だと言われてもな！」

光の粒子が剣帝いや、白騎士から立ち込める。

「理の外の剣よ、その力で未来を切り拓け！」

受けてみる、聖剣の瞬きを！

白き閃光が夜空に瞬く。

それは幻想ははたまた、別の何か。

「ぐはっ……」

「くっ……」

両者が同時に膝をついた。

マクバーンは血を流しているが、その目はしっかりと剣帝いやレオ

ンハルトを見続けている。

「う……くっ……！」

「立つんじゃねえよ、しっかし……やられたぜ」

「まだ………なのか………」

光の粒子が加速する、だがソレをマクバーンは止めた。

「俺の負けだ、まったく、冗談じゃねえ。レーヴエ、きえんじやねえぞ」

「……判っている」

それは友情ではない、だが敵対心でもないのだ。

「ライジングサン！」

「ぐはっ……なんちゃって」

「カンパネルラ、いい加減にしてくれないかしら」

「僕だってやめるさ、君達が戻ってくれるなら、それこそレーヴエの事も盟主様に報告できるし」

ロイド、リーシャ、ブルブランは3人に分身したカンパネルラと戦っていた。

ブルブランの分身とアーツによる援護、ロイドの打撃とリーシャの斬撃、その連続だがカンパネルラはフヨフヨと漂いながらいなしてみせた。

「なっ！ 却炎に道化師!! それに……怪盗紳士と剣帝までも」

「死線か、俺はもう戦う気はねえよ。灰の小僧、お前もいいぐわいに混ぜてるな。だが、レーヴエ程じゃねえ」

「……会議を襲撃するのか」

「そのつもりだったが、やる気が失せてな。今は気分が良いんだよ」

「ふむ……それは私が困るな」

「あん？」

それは不気味に漂う面だった。

「教官……」

「なっ……ユウナ！ 来るな!!」

ユウナと呼ばれた少女に何か近づいていた。だが……

「リーシャー!」はい!ロイドさん!!」

「真・比翼双竜撃!!」

それは鋭い触手であった。だが、ロイドとリーシャのコンビクラフトでそれは消え失せる。

「大丈夫か、ユウナ!」

「戦えますか!」

「え……嘘……ロイド先輩に……リーシャさんも」

だが、まだ攻撃は止まない。しかし、今度は別の触手を導力レーザーが消滅させる。

「つたく、何だよそれ。せつかく持ってきた意味ねえじゃねえかよ」

「ランデイさん、持ってきたのは私です」

「そうかよテイオ助!ロイド、手伝いに来てやったぜ?」

「ランデイ!テイオも」

そして、パチパチと拍手が贈られた。だが、それは憎しみが込められているとわかる。

「灰の騎士に特務支援課、執行者。いやはや、哀れな者たちが来たものだな」

「ワイスマン!!」

レーヴェがボロボロの肉体を奮い立たせる。

「ちっ……レーヴェ、落ち着け」

「何……今宵も実験だよ。丁度よい人材が居たのでね」

それはリーンを苦しめるには十分だった。

否、新7VII組のメンバーと会話までしていたのだから。

「はじめましての人も居るな、私は身喰らう蛇の使徒。白面のワイスマンという。そして、此方は」

「アルフィン殿下……白面何を」

「素晴らしいと思わないか、この娘の兄妹セドリックとはある存在の媒体となった。ならば……その血は十分だ」

「よせええええ」

リーンが神気合一を無意識に発動させ、白面に迫るが白面はアルフィンに何かを施す。

「あつ…リイン……………さん」

アルフインはリインの目の前で異形へと姿を変えたのだ。

「フハハハ…フハハハフハハハフハハハフハハハ」

「ワイスマン!!!」

「レーヴェ、君の力でも助けられはしないぞ。君自身が死ぬのだから、
くくつ…さあ、怨念をまといし巫女よ」

それは人ではない、月に吠える獣であった。

「アオオオオオオン」

第17話

「ちい…アングバール！」

「くっ！ランディ！！」

「わかってる！」

「バーニングレイジⅢ」

ロイドとランディのコンビクラフトで赫黎い大狼は一瞬怯む。

「殿下！！」

ソレを隙と見たリインは攻撃の合間を縫って大狼に迫る。

「何してやがる！」

「くっ……身体が」

駆け出そうとした剣帝の身体中から血が溢れる。

痛みがない、剣帝は踏み出そうとするが動かない。

そう、痛みがないのではない。

感覚が麻痺し痛み『すら』感じられないのだ。

「…」

ソレを理解したのか赫黒い大狼は剣帝を喰らわんと迫る。

「くっ……」

「レーヴェ！！」

しかし、その牙は届かない。

「何やられそうになってるのさ！！僕の知る君は……誰よりも強かった！！」

「……レーヴェ、勝手に死ぬなんてレンは許さない。エステル、ヨシユアと一緒にリベールに帰るんだから！！」

それはレーヴェの弟と妹であった。今にも死にそうな剣帝を文字通り、身を挺して守るのだ。

「リイン…シユヴァルツァー……騎神は呼べるな！」

「え…はい！」

「どうせ、生身で戦った所で勝ち目など無い。マクバーンにやらせれば、クロスベルが減ぶ」

「まあ…違いはないね」

「ああ…やれんのはてめえ…ぐらいだ」

「こい…灰の騎神ヴァリマール!!」

《応》

「こい…龍の機神ドラギオン」

ギヤヤヤヤス

空の至宝の光とともに龍騎士の様な機神が現れる。俺はそれに吸い込まれる様に乗り込んだ。

「…シユヴァルツァー、アレは言わば実態のある幻影だ。かの姫はあの魔獣の核となっている。問答無用で斬り続け、肉をたて！囚われの姫を救いだせ！」

「はい！レオンハルトさん!!」

巨大化したケルンバイターとゼムリアストーンの太刀が交差する。

赤黎い大狼はそれをジャンプで回避するとオルキスタワーの壁を降り始める。

「行くぞー！」「わかってます！」

「教官!!」

「…リイン君、レーヴェ君、アルフィンを…妹を頼む」

「ルシオラ、幻術の用意よ。私は結界を張るわ」

「ええ、深淵」

クロスベル市街地の上に結界を張られる。

赤黎い大狼はそこには着地すると、追いかけてきた2体に向かって咆哮しながら迫った。

「…動け…ドラギオン」

剣帝は既に満身創痍である、黒騎士だけでなく白騎士の力まで使ったのだ。

魂の消耗もはげしく、存在自体が危うく消えかけた程なのだ。

「頼む…相棒、家族の為に」

「大丈夫、私が、貴方を」

それは失った心の在処。

「私が、貴方を守るわ。レーヴェ」

「…カリン」

「レオンハルトさん！」

ドラギオンが加速する、自身に振り降ろされた前足を切り裂き、辺りに赤い血を撒き散らす。

そして、確かに自愛に満ちた瞳を向けている。

「シュヴァルツァー、行くぞ」

「はい、行くぞヴァリマール！」

「応」

淡い翡翠の光を放つドラギオンがヴァリマールに続く。ヴァリマールが右に斬り、ドラギオンは左を斬る。

連携などしたことがないはずだった。

いや、共闘というなれば一度だけある。

ハーメルでの一件、逆に言えばそれしかない。

だが、リインも剣帝も共に相手の動きを覚えていたのだ。

「…何？」

「シュヴァルツァー！」

剣帝はゼムリアストーンの刀が動かないヴァリマールを吹き飛ばす。

ヴァリマールの刀は赫黎い大狼の肉を断つことはできなかった。

技術が足りないわけではない、それは剣帝も理解できる。

斬るよりも先に赫黎い大狼の肉質が変化したのだ。

「ユウナ！ランディ！ティオ！」

「ちっ！ロイド!!やるぞティオ助！ユウ坊！」

「はい！ランディ先輩！続いて下さい！」

「わかりました！」

ユウナの銃撃に続き、ティオのアーツが赫黎い大狼の肉体を攻撃する。

「ベルゼルガー!!」

十三工房製のブレードライフル、ベルゼルガー。

その一撃でも赫黎い大狼が下がるのみ。

騎神と機神の2機でも倒せなかった存在を、ここに居る者達は救えると信じている。

「アルフィン殿下……必ず、俺が助けます！」

「へえ……化してやるぜ！灰の小僧!!」

リイン・シュバルツァーはその体を燃やす。

自身の鬼の力を受け入れんとする、救うために。

飲まれようと、逆に自身の意志の炎で燃やし返す。ソレを、マクバーンは笑いながら、その宿した焔の一部を分け与える。

それが意味することは

「炎鬼合一」

鬼の力と燃え盛る劫炎、2つの力を宿し、ヴァリマールが赤き闘気となり溢れ出る。

「剣帝！貴方はそこで伸びるだけの弱者か！違うでしょう！剣の腕で、貴方に勝てるものはいない！だから」

「レーヴェー！また、また！レンを！ヨシユアを」

それは剣帝レオンハルトの仲間たちからの激励。

死ぬ前にはいけない、進まなければ、家族と合うこともできない。

「ケルンバイター！」

「合わせてください！レオンハルトさん！」

「シュヴァルツァー行くぞ!!」

「騎龍抜刀」「何だそれは」

「決めが合つてねえよ」

最後の最後にランドルフに笑われながら、大狼に亀裂が走る。

「取り戻した……これで」

「まだだ！風神烈波!!」

「アリオスさんまで！」

「すまない、民間人の救出と気絶させるのに手間取った」

アルフィンという核が無くなったにも関わらず大狼は吠える。

「アリオス師兄、ロイドさん、ランディ教官、レオンハルトさん」

「決めるぜ……一番槍は貰った！ベルゼルガー!!!」

「ならば！二番手は俺だ……鬼炎斬!!!」

「続く…風神烈波!!!」

実力者達の攻撃が続いていく、そして

「…あのときは敵対したけど」

「ええ、今は行きます。七ノ太刀・落葉」

「ライジング・サアアアン!!!」

ロイドとリインの最後の攻撃で大狼が倒れていく。

「もうさ、想定外だよ。レーヴエ、君のお陰だよ。まったく」

ドラギオンに乗ったまま、剣帝は道化師を見る。

「カンパネルラ、俺はお前達の敵になると決めた。それに変わりはない」

「良いぜ……レーヴエ、次はやり合うか」

「その前に第7柱を倒す、お前はその後だ」

「死ぬんじゃないぞ」

結社の二人が消えたと同時にぞろぞろと第2分校の生徒が詰め寄せる。

レーヴエとリインはそれぞれ機体から降りる。

帝国の警備兵達も続々と来るだろう。

「レンちゃん！レーヴエさん！」

「ランデイ、ティオ、ユウナを頼んだ」

「はい、ロイドさん！リーシャさんも」

「ティータさん、ランデイさん、ユウナちゃんをお願いします」

「急ぐぞ、二人共」

「任せろ、ユウ坊は」

「ユウナ、俺を……俺達を信じてくれてありがとう」

「はい！ロイド先輩!!」

「……ティータ・ラッセル」

「レーヴエさんも、レンちゃんもつれて、必ず帰ってきてくださいね！」

「あら気付いてたの？私はこの悪いお兄さんのお目付け役だし」

「まったく……先に行くぞ」

レーヴエはビルから飛び降りるとそれに続くように仲間達が消えていく。

「……ははっ、ユウ坊、俺達が居なくても彼奴は変わんねえな」

「はい、絶対に挫けない。特務支援課は……私達の希望ですから」

「しかし、レーヴェも無茶したわね」

ドラギオンの背で、剣帝は静かに横たわっている。

身体は酷く衰弱し、ボロボロであるにも関わらず大きな戦闘を行ったのだ。

「……ああいう奴らがいる世界なら、守ってみたいと思えてくる」

「ヨシユアも疲れてるもの、レンのお膝で眠る？」

「……馬鹿言うな」

剣帝は軽く笑みヲこぼしながら、仔猫の頭を優しく撫でた。